

# J. ポール・ゲティー美術館の 傑作

装飾美術





# J. ポール・ゲティー美術館の 傑作

装飾美術







# J. ポール・ゲティー美術館の 傑作

装飾美術

ロサンゼルス

J. ポール・ゲティー美術館



口 絵：

ヘラクレス・ペンダント[部分]

フランス（パリ）、1540年頃

85.SE.237（no.9参照）

#### J. ボール・ゲティー美術館

発行者：クリストファー・ハドソン

編集長：マーク・グリーンバーグ

編 集：ジョン・ハリス

コーディネーター：エミー・アームストロング

写 真：ジャック・ロス

テキスト執筆：チャリッサ・ブレマー＝デヴィッド、キャサリン・ヘス、  
ジェフリー・W・ウィヴァー、ジリアン・ウィルソン

デザイン及び制作はチームズ・アンド・ハドソン社が担当し、J. ボール・ゲティー  
美術館と共同出版した。

翻 訳：マケニー田島千栄 (Christiane Di Mattéo Translations)

© 1997 The J. Paul Getty Museum

1200 Getty Center Drive

Suite 1000

Los Angeles, California 90049-1687

ISBN 0-89236-462-9

Color reproductions by CLG Fotolito, Verona, Italy

Printed and bound in Singapore by C.S. Graphics



## 目 次

|        |     |
|--------|-----|
| 館長あいさつ | 6   |
| 装飾美術   | 8   |
| 索 引    | 128 |

## 館長あいさつ

J・ポール・ゲティーは以前は家具や装飾美術品に特に興味がなかったのだが、1936年にニューヨークで、エイミー・フィップス・ゲスト所有の豪華な内装のアパートを借りて住んだのをきっかけに、熱心な収集家に転じた。「絨緞や家具にも、絵画や彫像に匹敵する美しさを持ち、創造力が発揮され高い芸術性が備わったものがある、というのが私の考え方だ。」と後に書き記している。折しも1930年代の美術品市場の暴落もゲティーには幸いした。彼は優れた装飾美術品の評価が絵画に較べ不当に低いと信じ、美術工芸品収集を専門にする動機をさらに強めた。それも18世紀のフランス物にはほぼ限定して購入するほどのこだわり様だった。

1971年にジリアン・ウィルソンを部門に迎えて以来、めざましい購入活動によりコレクションは拡張と偉大な発展を遂げた。古い物ではブールの作品を始め17世紀後期の家具や工芸品、新しいものでは19世紀初期の金魚鉢型シャンデリアを加え、コレクションが網羅する年代を広げた。中国や日本製の陶製パネル、セーヴル陶器、タピスリー、時計なども立派に各々の小部門を構成するだけの数量が買入れられた。ローマのヴィラを復元した美術館の二階を瀟洒に彩るフランス製美術工芸品は、当館でも最も歴史のある優れた部門を成している。

J・ポール・ゲティーが1976年に没し当美術館に寄贈した7億ドル余の遺産は、様々な活動を可能にしている。さらに重要なコレクションを築くのみならず、美術館に並行した組織を通じ美術の学究、保存、教育活動を画期的に展開し、さらに大規模な美術館をゲティーセンターに建設するに至った。

1980年代の初めゲティーが遺した資金の活用を始める当初に下された決断の一つは、従来のフランス作品に限定せず、広くヨーロッパの彫刻、家具、装飾美術品含むコレクションに拡張することだった。1984年にピーター・ファスコが彫刻・工芸品部門の学芸部門に加わって以来、主要品はガラスやマヨリカ陶器といった種類毎に分類され各々の展示室に収まり、イタリアや北海沿岸の国々からの家具工芸品は絵画展示室に配置されている。彫金や、ルネサンスから19世紀に至って文明人を魅了した宝飾類も、常時来館者の目を楽しませてきた。これら所蔵品の多くは、すでに出版した数々のカタログや装飾美術品集で紹介してきた。そのうち、この十数年ばかりの間に築かれた素晴らしい彫刻コレクションは、本書とは別に、傑作集や概覧カタログ、2冊組の集大成で紹介することになっている。

これを執筆する間にも、ロサンゼルス西部のゲティーセンターに、リチャード・マイヤー設計による新美術館の建設が進んでいる。フランスの家具と美術工芸品は、ティエリ・デポンの設計による、それぞれ異なる時代を設定した十四の部屋に展示されることになっている。この仮想フランスを挟んでフランス以外のヨーロッパの国々からの美術



工芸品と彫刻を展示する特別仕様の九室が続き、このほか絵画展示室にも何点か展示される予定だ。素晴らしい美術品が最高の状態で、且つ、それらが使われていた当時が忍ばれるような設定に力を注いだつもりだ。チャリッサ・ブレマー＝デヴィッド、キャサリン・ヘス、ジェフリー・W・ウィヴァー、ジリアン・ウィルソンら、装飾美術・彫刻部門の担当者が入念に作り上げた本書が、当館を実際に訪れるきっかけになればと願っている。

館 長  
ジョン・ウォルシュ

- 1 イスパノ＝モレスク（スペインムーア風）深皿（Brasero）  
スペイン（バレンシア地方）、  
15世紀中期

錫釉陶器、ラスター彩  
高さ10.8cm  
直径49.5cm  
85.DE.441



ルネサンスのラスター陶器は、その玉虫色の表面装飾はもとより、中世以来の錬金術者の夢が叶ったかがごとく、まるで金に様変わりしたかのような素材の変容も賞賛的となった。

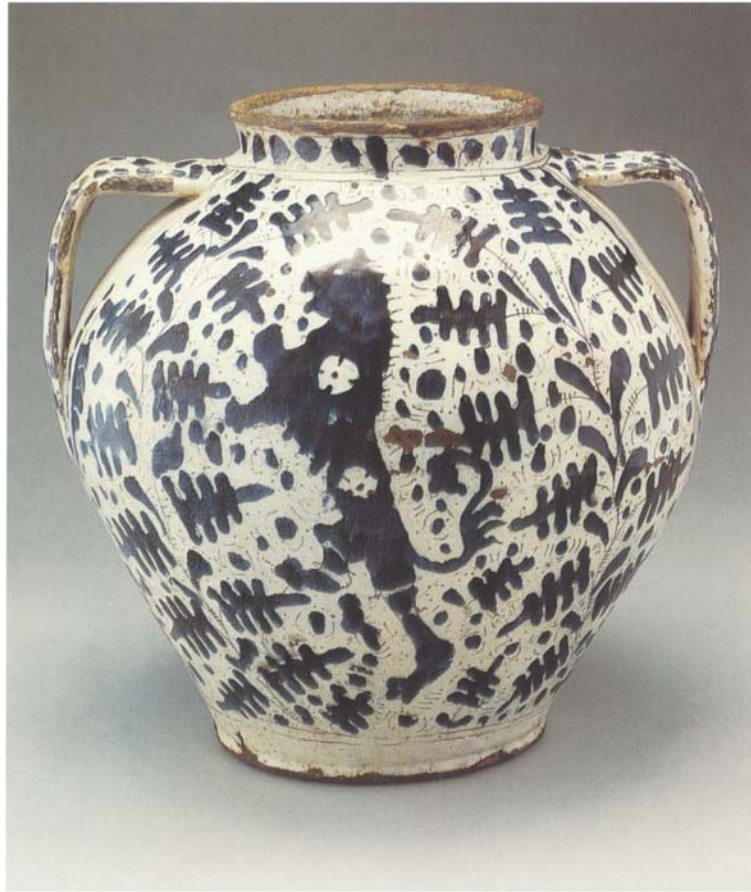
800年頃から現在のイラクで作られ始めたラスター陶器は、13世紀にイスラム圏の西端、スペインのマラガに伝わり、やがてそこからヴァレンシア地方に広まった。15世紀までにはヴァレンシアで作られるようになったラスター陶器は、イタリア、特にフィレンチェに輸出され裕福な人々の手に渡った。ラスター陶器の多くがマヨリカ経由で輸出されたため、15世紀のイタリア人は、スペイン製ラスター陶器をマイオリカと称するようになった。しかし錫釉の陶器全般がマヨリカ陶器と呼ばれるようになったのは16世紀になってからのことだ。

中央にはIHS（救世主キリスト）のモノグラムが入っている。食器として使われた可能性もあるが、大きさ、豪華な装飾、完璧な保存状態から、むしろ飾り皿として食器棚などに展示されたものと見られる。



2 「樗葉」 壺  
(Orciuolo Biansato)  
イタリア (フィレンツェ)、  
1425-1450年頃

錫釉陶器  
高さ 39.4cm  
最大幅 40cm  
口径 19.4cm  
84.DE.97



この壺は知られている限りこの種で最大のものだ。全体に広がった植物文や獠猛な獅子などの装飾は、濃い顔料を使って厚く図柄を描き入れ、釉焼成して図柄を浮き立たせるレリーフブルーという陶画法だが、ここでは比較的薄めの顔料が使われている。両面を飾る獠猛な獅子は、マルゾッコという市章にちなんだものと見られ、フィレンツェに相応しいモチーフである。この模様は、イタリアの家紋か織物など他の装飾品から派生したものである可能性もある。

各取っ手の下に染め付けられたアスタリスクは恐らくこれを制作した陶房の印で、当時のフィレンツェの最大手ジュンタ・ディ・テュジオ（1382-1450年頃）のものだ。ディ・テュジオは、1430年前後フィレンツェのサンタ・マリア・ヌオヴァ病院向けの薬壺一千個弱を請け負ったことでよく知られ、そのいくつかは今日まで残っている。

3 水差し  
イタリア（ムラーノ）、15世紀  
末もしくは16世紀初め

吹きソーダガラス、鍍金、エナメル  
高さ27.2cm  
最大幅19.3cm  
口径2.9cm  
底径13.9cm  
84.DK.512



この水差しは、ルネサンスの高級ガラス器の逸品である。祭礼用水差しなど従来の金属器の形を応用した15世紀のガラス製水差しは、ワインなどを饗するのに使われた。この作例は四つの部分からなり、先に鍍金しエナメルを施してから接続されている。

首の部分の波文様は、IHSに陽光が差したシエナの聖ベルナルディーノの信者の徽章を想起させるが、単なる飾りである可能性もある。形状とエナメル細工はイスラム様式を習ったものらしい一方、斑点状に透かした「魚鱗」鍍金は、当時のヴェネツィア・ガラスの特徴を見せている。

偶然にもこれに最も類似した作例とされる紺青の水差しもカリフォルニア南部にあり、近隣のロサンゼルス美術館で見ることができる。

4 飾り皿 (Piatto da Pompa)  
イタリア (デルータ)、  
1500-1530年頃

錫釉陶器、ラスター彩  
高さ8.8cm  
直径42.9cm  
84.DE.110



この皿を飾る理想化した女性像には、デルータが位置するウンブリア地方出身の画家、ペルジーノ（1450-1523年頃）やピントリッキオ（1454-1513年頃）の画風や肖像画の影響が歴然としている（事実、ピントリッキオの妻はデルータの陶芸家の娘だった）。デルータ産のマヨリカ陶器には男女の古典的な横向きの胸像がよく描かれている。いずれも容姿が良く似ているのは、素描や版画から陶器に模写されたためで、その源泉は同地に存在した有名な絵画作品であったと推察される。

銘帯には「在世生きる者のうちに生き、死しても生きる者のうちに生きん」という意の銘文が入っている。注文主が、肖像に描かれた亡き女性に寄せた変わらぬ愛を誓ったものであろう。

デルータの陶工はイスパノ＝ムーア陶器を模して、酸化銀を使った黄味を帯びた青銅の趣があるラスター陶器を作った。一方、イタリア窯業の中心地であった近隣のグッピオでは、さらに光沢のある艶やかなルビー色を出す酸化銅を使ったラスター彩のマヨリカ陶器が作られた。



5 脚付き広口ガラスのガラス部分  
ボヘミア（推定）もしくはイタリ  
ア（ムラーノ）、1525-1575年頃

吹きソーダガラスに鍍金、  
エナメル、ダイヤ尖頭彫り  
高さ22cm  
口径19cm  
底径7.8cm  
84.DK.547



これは、珍しくヴェネツィアと北ヨーロッパの融合が見られる重要な作品である。融接によるコバルト色の筋や浮き出し彩色、口まわりの「魚鱗」文様のエナメル細工はムラーノガラスの特徴だが、表面に融接された飾りや円錐形状は北ヨーロッパ独特のものだ。

裾すばまりになっていることと、底に研磨した跡があることから、元あった脚が取れたため壊れた部分を削りガラス部分を残したものと推察される。

- 6 蓋付き広口グラス (Wilkommglas)  
オーストリア(チロル地方のハル)、  
1550-1554年頃  
セバスチャン・ヘークステッター  
(1540-1569年)の工房作(推定)

吹きカリガラス、エナメル、彫刻  
高さ(蓋込み) 37cm  
高さ(蓋なし) 28.5cm  
口径 12.4cm  
底径 14.3cm  
84.DK.515.1-2



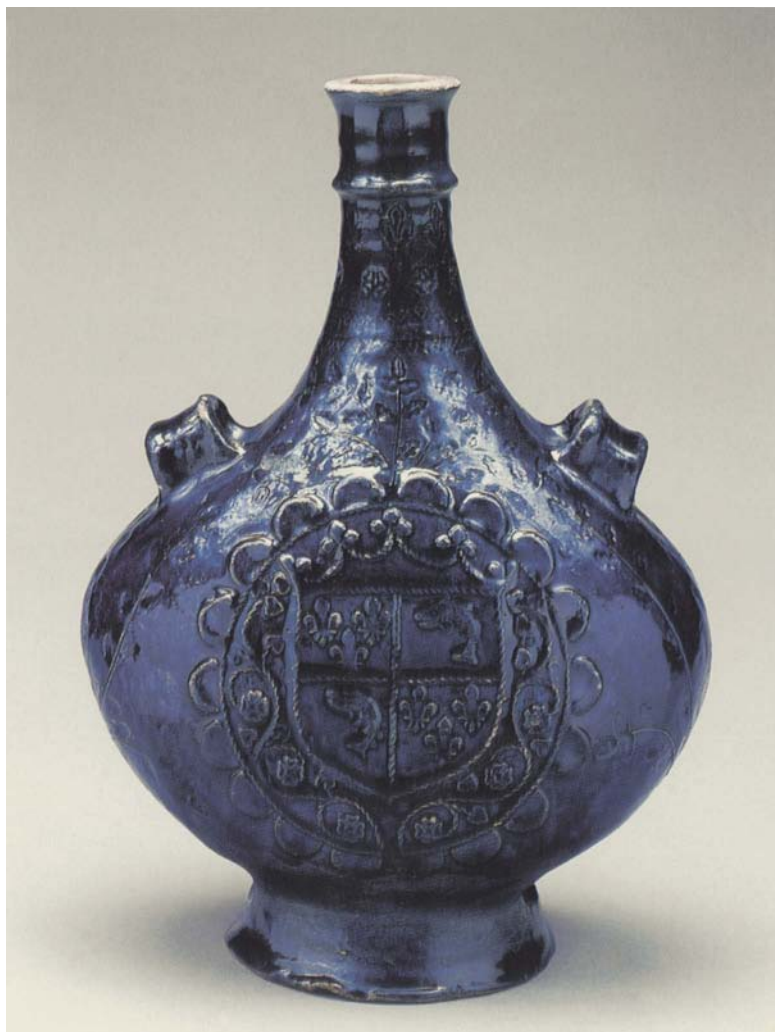
現存する彫刻入りヴィルコムグラスでは最古の作例である。両側に入った家紋からトラップ家の先祖の所有であったことが判明し、さらに同家の紋はその後1555年にもう一つの家の紋を組み込んで新しいデザインにされたため、変更前の1555年以前に作られたものであることが判る。

ヴィルコムグラスは客を歓待して乾杯する際に使われたもので、名前や紋章が入っているだけでシンプルな物が多い。実際、来賓の名と訪問日を記録する来客名簿の役割をした。一つを除きすべてが1559年から1629年の間に刻まれた記述で、チロルのフェルディナンド大公と甥のマクシミリアン1世を始め、フォン・プランク、フォン・フシユスタット、フォン・ヴェステルナッハ、フォン・シェルフエンヴェルグ、フォン・オッペルドルフ等のチロルの大家の名が見られる。

緑のエナメルと鍍金の破線はヴェネツィアガラス装飾の特徴を、形状と灰褐色の地はチロルガラスの特徴を見せている。

7 巡礼の水筒  
フランス  
(ブルゴーニュ地方パイゼー)、  
16世紀初期

コバルト釉堅焼陶器  
高さ33.5cm  
幅23.5cm  
深さ13cm  
95.DE.1



フランス製最古の貴族用の堅焼陶器、「グレ・ブルー・ド・パイゼー」の重要な現存例である。パイゼー陶器には、ボシェテル、ローラン、フェリエール、ショセーといった大家の家紋が入ったものが数々ある。おそらく中東から輸入された光沢ある酸化コバルト釉からその名がついた「グレ・ブルー・ド・パイゼー」の生産は15世紀末まで逆のぼり、オルレアン公と後のルイ12世の側近を務めたフランソワ・ド・ロシュシュアがブランシュ・ドーモンと結婚し、サン＝アマンに堅焼き磁器の工場を設立したときに始まる。15世紀以前から窯業が発達していたボーヴェ出身のドーモンが、パイゼーに陶芸をもたらすのに一役買ったものと考えられる。





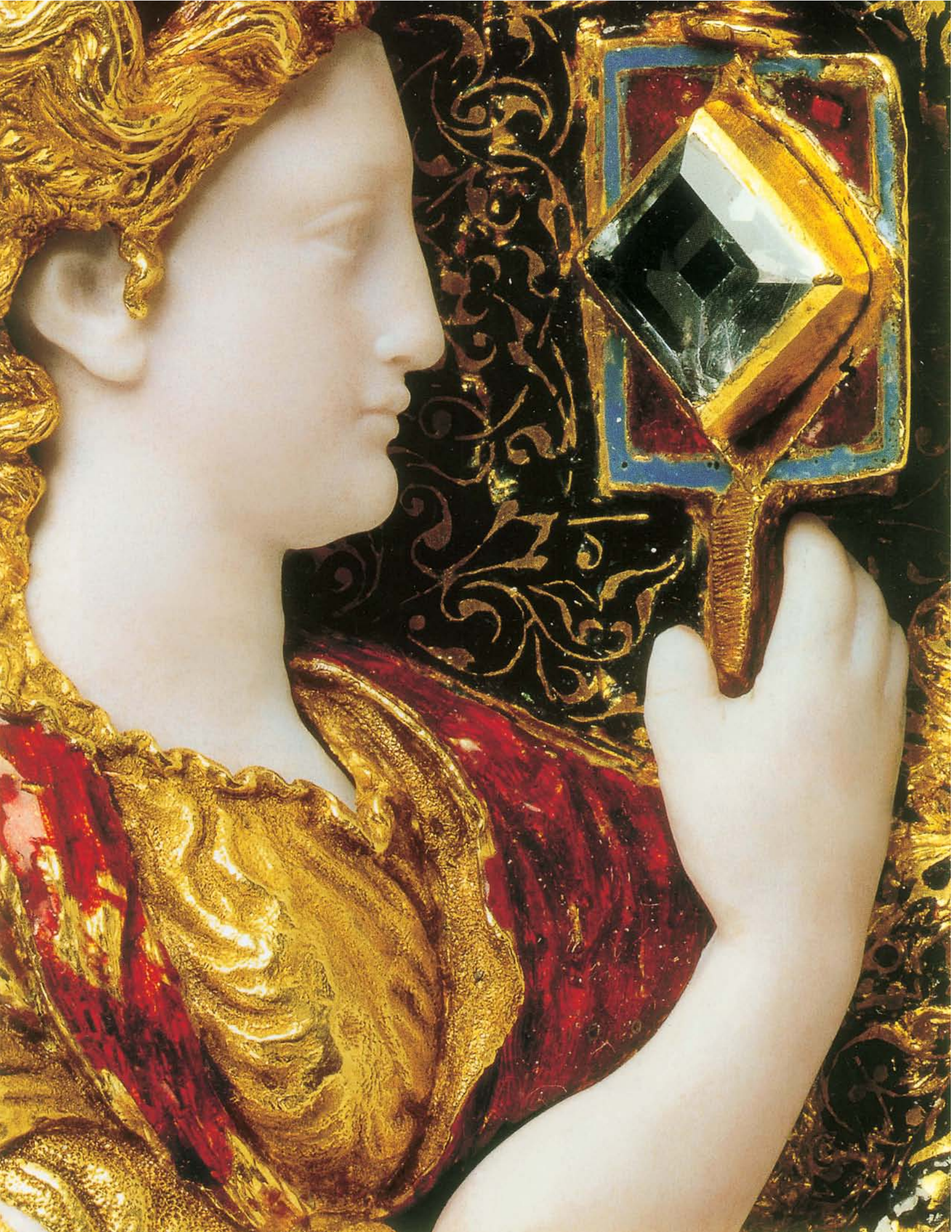
- 8 楕円形手水鉢  
フランス（パリ）、1550年頃  
ベルナール・パリシー作  
（推定）（サント、1510?-1590年）

鉛釉陶器  
長さ48.2cm  
幅36.8cm  
88.DE.63

多才多才のベルナール・パリシーは、陶芸家であると同時に科学者、宗教改革者、庭園設計家、吹き硝子職人、土地測量家、思想家、地質学者でもあった。なかでも「フィギュリーヌ・リュスティック（田舎風陶器）」と呼ばれる、甲殻類や爬虫類や植物そのものから型を取り伝統的な形状の器を飾った陶器で知られている。自然味あふれる装飾に薄い鉛釉をかけて、水中の感覚を高めている。

パリシーの田舎風陶器は評判をよび、16世紀半ばにはアン・ド・モンモランシーやカトリヌ・ド・メディチの注文で、当時よく私邸の庭園に気晴らしや瞑想の場として作られた洞窟の装飾を請け負った。その人気は、生存中から模倣されたばかりでなく、フランス人の模倣者や偽造者が絶えなかったのはむしろ、19世紀にはイギリスのウエッジウッドやフランスのセーヴルと言った大手が模造したほどだ。







9 ヘラクレス・ペンダント  
フランス（パリ）、1540年頃

金に白、青、黒のエナメル細工、  
バロック真珠  
縦6cm  
横5.4cm  
85.SE.237



「ヘラクレスの十二功業」のうちカデイスの支柱を立てている雄姿を描いたもので、その男性的な主題から男物の装飾品とみられる。表にはヘラクレスの深彫りレリーフ、裏にはエマーユ・シャンルヴェ（金属地を彫って釉を注ぎ磨いたもの）の細工が施されている。地中海に海の怪物が侵入するのを阻止するためヘラクレスがジブラルタル海峡を開いたという逸話には、山を押し開いてふたつに分けたという説と、記念にふたつの山を起こ

したという説の二通りある。

同主題を描いた作例は稀だが、1540年にフランソワ1世が義弟のカルル5世のパリ訪問を歓迎して選んだものがある。このブローチには、フォンテーヌブロー宮でフランソワに仕えた芸術家、殊に金工長だったベンヴェヌート・チェリーニの作風と酷似性が見られる。珍しい主題、贅沢な素材、精巧な細工からして、このペンダントは王家の注文品であったと推察される。

10 「賢明」の帽子飾り  
フランス（パリ）、1550-1560年

金に白、青、赤、黒のエナメル、  
玉髄、テーブルカット・ダイヤモンド  
縦5.7cm  
横5.2cm  
85.SE.238



この種の宝飾品は、裏に付いた輪を通してピンで止めるか縫い付けるかして、折り返した帽子のつばを止めるための装身具として使われたもので、15世紀中葉から16世紀後半まで流行った。この「コメッシ」と言われる珍しい貴石工芸は、フランス人とイタリア人細工師の密接な共同制作によってもたらされた。（1527年のローマの掠奪の際イタリア人芸術家が仕事を求めてフランスに流入

したため特に盛んになった。）「コメッソ」とは「コミッティド（組み合わせた）」、つまり石をジグソーパズルのように組み合わせる過程を言い、この技術は古代の貴石工芸品を修復するのによく使われた。

主題は、正義、剛毅、節制とともに四つの「枢要徳」とされる「賢明」の擬人像である。手にした鏡は自己をありのまま思慮深く見極める能力を意味し賢明さを表現している。主題からして女性の持ち物らしく、「賢明」の守護を求め美徳にあやかろうと身に付けられたものであろう。

左の拡大図参照



11 薪乗せ台一對  
フランス（フォンテーヌブロー）、  
イタリア人金工作、1540-1545年

ブロンズ  
高さ 85.1cm  
底幅 40.6cm  
94.SB.77.1-.2



カリアティッドが軒の代わりに壺を支えた形のこのブロンズ彫刻は、暖炉の薪乗せ台として使われたものだ。ニンフとサテュロスを表わしたこの一對は、紐状細工や壺の蓋にサラマンダー（フランソワ1世の紋章）が付いていることから、フォンテーヌブロー宮の調度品としてデザインされたものである可能性が大きい。優雅で表現豊かなマニエリスム様式は、これがフォンテーヌブローの工房で仕えたイタリア人の作であることを示している。サテュロスのひねりの効いたポーズ、隆々とした筋肉、感情のこもった表情、そしてニンフの長く伸びた身体や冷ややかな高雅さは、1540年前後にフォンテーヌブロー宮の内装の第一段階を受け持った、ロッソ・フィオレンティーノ（1494-1540）やフランチェスコ・プリマティッチオ（1504-1570）の作風に共通するものだ。人の形をした薪置き台ではおそらく最古の例であろう。



12 長櫃 (Cassoni) 一对の一点  
イタリア (ウンブリア)、  
155 (9?) 年の日付  
アントニオ・マッフェイ作  
(推定) (1530年頃グッピオ生)

胡桃材の彫刻、部分鍍金  
高さ 75cm  
幅 181.5cm  
上板奥行 59cm  
脚部奥行 76.2cm  
88.DA.7.1

ルネサンス時代、カッソーニ (長櫃) は新居の調度を助けるために新婚夫婦に結婚祝いとして贈られたものがほとんどだった。この一組は、大きな家紋と内部に見つかった手書きの記述から、16世紀中葉、フォリーニョのプレシッラ・デコンティがグッピオのチェザレ・ベントイヴォーリョと再婚した際に作られたものであることが判る。

制作者はアントニオ・マッフェイという、ウンブリアで彫刻と装飾彫りを営む名家の血筋でも最も賞賛されたひとりとされる。この一对は両方ともルネサンス盛期の典型である棺桶形のどっしりした形で、曲線的な植物文や力強い建築物のモチーフの深浮き彫りが施されている。しかめ面でグロテスクな容姿の異様な人象は、マニエリスム初期特有の奇妙かつ優雅に歪んだフォルムへの関心を露にしている。

この一对は、蓋の裏の18世紀もしくはそれ以前のものと見られる記述から制作年が断定できるだけでなく、それぞれほとんど全体が一本の幹から彫り出された物なので、ほとんど後から手を加えられた可能性がないため、確実に16世紀中葉の作で原形を留めた希少な家具である。







- 13 デウカリオンとピュラを描いた  
手水鉢 (Bacile Trilobato)  
イタリア (ウルビーノ)、  
1565-1575年頃  
オラツィオ・フォンタナ (1510-  
1571年、カステル・デュランテ  
生) もしくはその工房作

錫釉陶器  
高さ 6.3cm  
直径 46.3cm  
86.DE.539

左の拡大図参照



この種の器は、多くが晩餐の席で料理と料理の間に手を濯ぐための香を付けた水を供した物だが、この作例は凝った形と装飾からして飾り皿であったと見られる。中心に描かれたのはオヴィディウスの「転身物語」(1巻:315-415行)にある「デウカリオンとピュラ」の物語だ(詳細は左図参照)。ゼウスが引き起こした大洪水を生き延びてパルナッソス山の寺院に辿り着いた夫婦デウカリオンとピュラが「どうすれば新しい人類が創造できるか」と神に問うと、母の骨を後ろに向かって投げよとの神託があった。デウカリオンは母とは母なる大地のことと理解し、二人が後に向かって石を投げ始めると、地面を打った石が次々人の姿をして現れたという伝説である。

オラツィオ・フォンタナは、16世紀中葉最も人気を博した斬新な陶芸家であった。彼が開発に助力した新しいジャンルのマヨリカ陶画は、バチカン開廊にあるラファエロのフレスコに着想を得たもので、その源泉は当時再発見されたばかりの古代ローマのネロ帝の黄金宮「ドムス・アウレア」として知られる「洞窟」の壁画に逆のぼる。このラファエロ風もしくはグロテスク文様として知られる優雅で空想的な装飾が彼の陶器を占める部分はしだいに広がり、この作例のようにさらに「バロック様式」が進んだ後期の作品では大部分をグロテスク文様が占め、昔ながらのルネサンス様式が色濃い物語絵は、メダリオンやカルトゥーシェの小さなスペースに追いやられてしまっている。

- 14 皮を剥がれるマーシアスが描かれた皿  
イタリア（ウルビノ）、1520年代半ば  
ニコラ・ディ・ガブリエレ・スブラーゲ作、通称ウルビノのニコラ（1480年頃-1537/38年、ウルビノ出身）

錫釉陶器  
高さ 5.7cm  
直径 41.4cm  
84.DE.117



この陶画を描いたのは16世紀のマヨリカ陶芸家では恐らく最も才能と人気があったニコラ・スブラーゲとされる。「Nicola da Urbino」と署名された彼の作品は、豊かな色彩を使った繊細で洗練された人像と空間描写を特徴とする。その卓越した技術に、彼の作品は16世紀の名だたるマヨリカ陶器愛好家の熱望の的であった。1525年頃イザベラ・デステの注文で目を見張るようなディナーセットを作り、1530年代にはイザベラの息子フェデリコ公にも同様な品を納めた。この皿は中央の家紋が示しているように、プレスシア出身のカリーニ家の一族が詔えたかもしくは寄贈されたディナーセットに属していた。

オヴィディウス著「転身物語」（1497年ヴェネチア版）にある、アポロとマーシアスの神話とアポロとパンの競争を描いた二点の挿絵をもとにこの情景が描かれた。マーシアスが老若の二通りで登場するのもそのためだ。



15 薬瓶一对の一点

北イタリア、1580-1590年頃  
アンニバーレ・フォンタナ作  
(推定)  
(1540-1587年、ミラノ出身)

テラコッタに彩色と鍍金  
高さ 52cm  
口径 17.8cm  
最大直径 40cm  
90.SC.42.1



ミトリダテース6世が発明したことから「アンティドータム・ミトリダティカム（解毒、坑毒剤）」と呼ばれる特殊な薬剤を入れたこの容器は、この王の一生を主題にした装飾が表面を飾る華美な作品である。ミトリダテースは紀元前111年にポントス王国の王座についた人物だ。毒殺の恐怖に駆られたミトリダテース王は、素人ながら独自の坑毒剤を処方して定期的に服用していた。ローマ帝国攻撃に失敗した際、毒をあおって自殺を試みたが、常用していた坑毒剤のおかげで死にきれず、思い余って自身の衛兵に討ち殺させるに至った。その後この薬は、北イタリアとフランスを中心に大層評判になり何世紀にも亘って製造されたため、その容器の需要も衰えることがなかった。

組紐文、マスクなどの浮き彫りや小さな彫刻像から成る装飾は、16世紀末の豊かなイタリア装飾の全てを見せてくれる。マニエリスム特有の踊るようなポーズをした像、躍動感あるレリーフ、激しくも優雅に表現された幾分引き伸ばされた身体、奇妙だが官能的な裸体像などには、当時ミラノで主導的な彫刻家であったアンニバーレ・フォンタナの作風と密接な関連性が認められる。

16 カンデリエリ装飾の皿  
イタリア（ヴェネツィア）、  
1540-1560年頃

錫釉陶器  
高さ 5.7cm  
直径 47.7cm  
84.DE.120

右の拡大図参照



この皿は、卓越した気品と洗練された装飾が見られる当時のマヨリカ陶器の逸品と言える。風変わりながら優雅な中央の人像の驚いた表情、異様に長い身体、ねじれた胴の端が植物文に巻き込まれているところなどはマニエリスム特有の表現で、その空想的な性格を強調している（詳細は右図参照）。陶画の上部に見られる美しいドレープ状の縁飾りや、右側のグロテスクな像の優雅に重ねた腕の片方がもう一方に陰を落としているといった細やかなところには、マニエリスム様式の優雅さの極みを見るようだ。

この陶画は「カンデリエリ様式」というキャンデラブラム（多灯燭台）から名がついた左右対称の構図になっている。この様式は概してカステル・デュランテで作られたマヨリカ陶器の特徴とされるが、この皿の大きく浅い形状と灰色がかかった青の地色はヴェネツィア陶器の典型である。









17 水差しと手水鉢

ドイツ（アウグスブルク）、  
1583年

アブラハム・プフレーゲル1世  
（活動期1558年-1605年没、アウ  
グスブルグ出身）

銀、部分鍍金、エナメルの飾り板、  
彫刻

（水差し）

高さ 25cm

（手水鉢）

直径 50.5cm

85.DG.33.1.-2

16世紀のアウグスブルクを代表する才能ある銀工であったプフレーゲルは、有力者からの注文を多く請け制作したにも関わらず、ほとんど作例が現存していない。この水差しと手水鉢は晩餐の席で料理と料理の間に手を濯ぐ香を付けた水を供すのに使われたものだ。ドイツきっての銀行家フッガー家と、ハンガリーの名門、パルフィ・フォン・エルドーズ家の縁組を記念したもので、ウィーンの公証記録文書（ホフカメル）によると、1583年にマリア・フッガーがニコラス・パルフィ・フォン・エルドーズ公爵に嫁いだ際、フッガーがこの二組の水差しと手水鉢を逃えたという。この非常に抑制が効いて格式ばった様式は、プフレーゲルの他の現存作品とも申し分なく一致し、この一組が記録文書にある二組のうちの一つであることを裏付けている。



18 巡礼の水筒  
(Fiasca da Pellegrino)  
イタリア（フィレンツェ）、  
1575-1587年頃  
メディチ陶器工場

軟質磁器  
高さ 26.5cm  
最大幅 20cm  
口径 4cm  
86.DE.630



この水筒は最古のヨーロッパ産磁器の一例である。16世紀末には上流階級におけるマヨリカ陶器の人気に陰りが見え始め、代わって中国磁器への関心が高まり、かねてからの新しいものや珍しいものへの需要もあって、磁器が高級陶磁器の市場を独占するに至った。

この作品は現存わずか六十点程という極めて貴重なメディチ工場製の磁器の一例である。メディチ工場はトスカーナ大公コジモ1世が、クリスタルガラス、織物、陶芸など美術工芸の振興のために創設したもので、息子のフランチェスコ1世の時代になって、ここで初めて磁器生産の成功を見た。1587年のフランチェスコ1世没後は数十年で廃れた磁器生産は、ほぼ1世紀を経た1673年に、驚いたことにフランスのルーアンでレイ・ポテラに再興されサン＝クルーに受け継がれた。

このメディチ磁器は形良い白地の壺に鮮やかな濃紺の陶画の入った非常に美しいものだ。アラベスク模様やバラ、カーネーション、チューリップ、椰子などの花模様は、1500年頃のトルコ・イズニック陶器の流れを汲んだモチーフである。







19 テーブルの上板  
イタリア（フィレンツェもしくはローマ）、1580-1600年頃

ピエトレ・デューレ（硬石）と各種大理石の象嵌細工（ブレチア・ディ・ティヴォリ、縞大理石、ラピスラズリ、珊瑚、水晶、碧玉などを含む）

縦 136.5cm

横 113cm

92.DA.70

左の拡大図参照



硬石と軟石をパズルのようなモザイク状に寄せたコメツソ細工は、古代ギリシャやローマで隆盛を見た後、ルネサンス期にフィレンツェとローマを中心にイタリアで再び盛んになった。ルネサンス初期は幾何学模様が大半であったが、16世紀末には手法もより高度になり、この作例にあるような巻き髭状の植物文などの具象表現も加わった。白の大理石で輪郭取ったひとつひとつの仕切りに豊かな色彩のモチーフが展開し、宝飾品のような美しさを見せている。

法王ピウス5世の統治のもと（1559-1565）インノセンツォ・デル・モンテ枢機卿が赴任していた際、ティヴォリのクウインティリオ宮遺跡で発見された大理石の一種、ブレチア・ディ・ティヴォリが含まれていることから、この上板は1559年以後に制作されたものと断定できる。

20 脚付き器 (Coppa)  
イタリア (ムラーノ)、1500年頃

吹き玉髄ガラス  
高さ 12.3cm  
口径 19.7cm  
底径 10.6cm  
84.DK.660



カルチェドニオ・ガラス (玉髄) は、15世紀末にヴェネツィアのムラーノ島で創造された。この不透明なガラスの発明は、アンジェロ・パロヴィエールという当時のヴェネツィアガラス職人の単独の功績とされる。ムラーノ島で1330年から代々ガラス作りに従事していた家に生まれた彼は、ヴェネツィアガラスにルネサンス様式をもたらした、クリスタッロと呼ばれる水晶に似た透明な薄ガラスをも編み出した可能性がある。カルチェドニオのマーブル模様は、成型する前のガラスに様々な酸化金属を練り込むことによって得られる。この青、緑、茶、黄色が渦巻く模様は、古代ローマ時代に創造されて珍重され、ルネサンスにイタリアで再び盛んになった切り細工の硬石器を思わせる。

21 融接装飾付広口グラス  
(Berkemeyer)  
南ドイツ (ライン下流もしくはネーデルランド)、1500-1550年頃

吹きカリ石灰ガラス、融接装飾  
高さ 13.5cm  
口径 12.9cm  
底径 8.5cm  
84.DK.527



この型のグラスは15世紀以来ドイツで親しまれてきたもので、その作製は今日まで受け継がれている。ガラス溶鉱炉に使う薪が豊富な人里離れた森林に工房があったことから、ヴァルトグラス (森のガラスの意) と呼ばれる。ヴァルトグラスの緑がかった色は、当地の鉄分を多く含んだ珪土がもたらしたもので、その美しさと根強い人気に、ドイツでは無色透明のガラスの生産が可能になってからも生産が続けられている。

バルケマイヤーは「レーマー」というこれより丸みのあるグラスの漏斗型をした変種である。「レーマー」はライン下流の言葉「レーメン (豪語するの意)」にその名が由来するらしいが、恐らく飲めば豪語しがちなことからきていることは容易に想像できる。この作例は脚と本体が一体化した逆円錐形の初期のタイプで、空洞の脚の表面には装飾が融接されていて滑りにくくなっている。





22 器  
オーストリア（インスブルック）  
（推定）、1570-1591年頃

無色ソーダガラス、ダイヤ尖頭彫り、  
鍍金、非焼成エナメル細工  
高さ 16cm  
口径 40.4cm  
底径 13.5cm  
84.DK.653

この種の器はわずか四例しか記録に残っておらず、そのうちでもこれは最大で最も保存状態の良いものだ。これに見られる連続葉文、列柱、花網飾りなどのダイヤ尖頭彫りの技術は、16世紀中葉にムラーノ島で編み出され、1570年頃チロル地方のハルとインスブルックに伝わった。パルメット（ヤシ模様）はハルとインスブルックに共通して見られるが、他の作例との比較により、この作品はインスブルックにあった王立ガラス工場ホフグラシュッテで制作されたものと考察される。この作品には、同所の製品や1563年にそこを創立した大公フェルディナンド2世の旧所蔵品とされるものとの類似性が認められている。

この作品の植物文やそれに止ったゴシキヒワなどに見られるようなエナメルや金細工は、彩色後焼き付けない手法のため、時が経つに連れ大部分が剥がれてしまっている。この彩色技術は、エナメル焼成に耐えないか窯に入らないような非常に大きな器の装飾に使われたものであろう。

23 蓋付線条細工ガラス杯  
(Filigrana)

ガラス部分：ドイツもしくはイ  
タリア（ムラーノ）、16世紀後  
期～17世紀初頭  
銀鍍金細工：ドイツ（アウグス  
ブルグ）、1615-1625年

吹き及び型吹きソーダガラス、  
ラッティモ糸、銀鍍金細工  
高さ（蓋込）21.1cm  
高さ（蓋無）14.5cm  
口径 5.8cm  
底径 9.4cm  
84.DK.514.1-.2

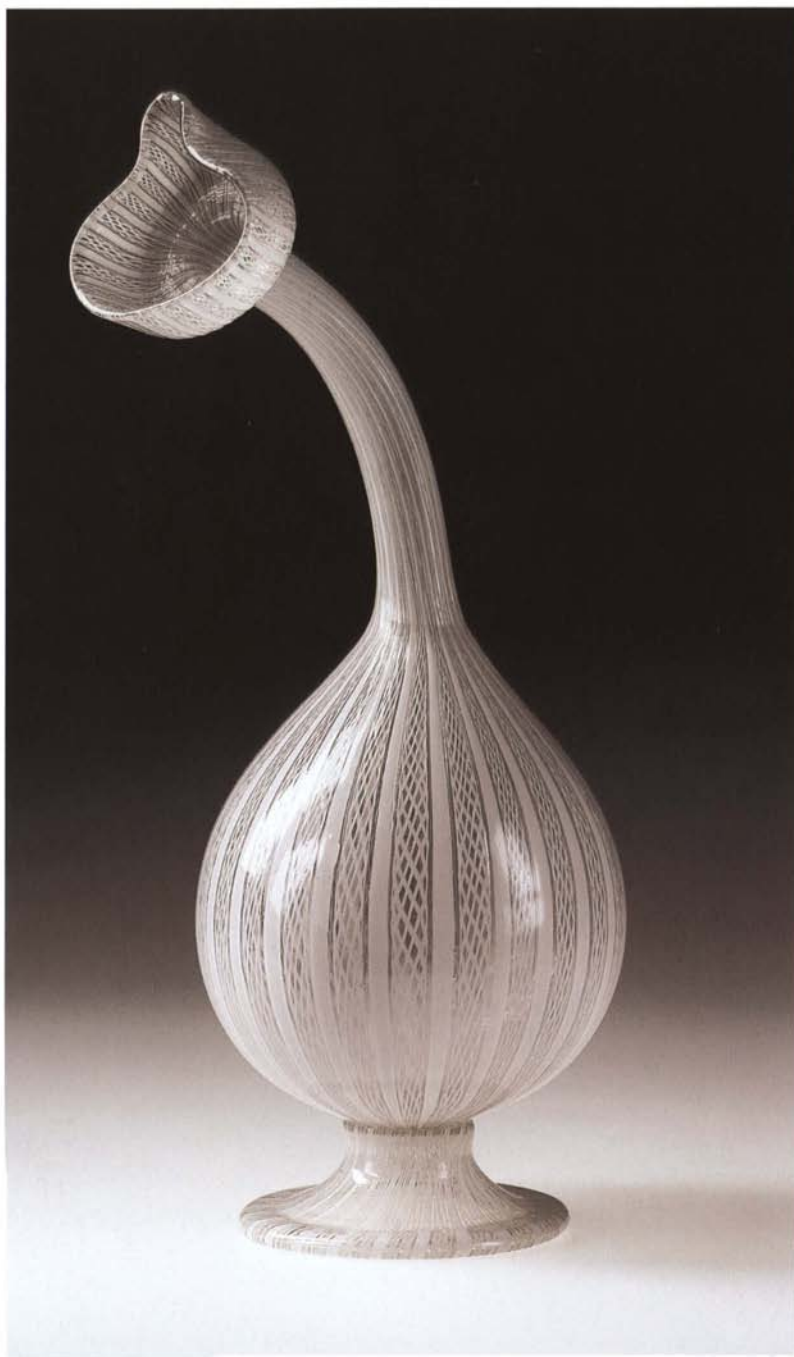


この種のガラス器は、他にはメトロポリタン美術館（ニューヨーク）のリーマン・コレクションに一点あるだけだ。この「縞り糸」状の線条細工のあるガラス器は、ムラーノ島で作られたものがドイツに輸出され、何十年も経てから鍍金細工が施されたものと見られる。蓋の縁に入った制作者印は、聖遺物器、宝石箱、時計などの鍍金細工を手掛けたマテウス・ヴァルバウム（1554-1632）のものだが、彼がガラス器の鍍金細工を扱ったのは極めて稀だ。さらに蓋の縁には1615-1625年当時のアウグスブルグの市章の印も入っており、この型のヴェネツィアガラス器は賞美されたため後年鍍金細工を施すまで大切に保管されていたか、もしくは17世紀になってからも制作が続けられていたかのどちらかと推察される。



24 線条細工ガラス瓶 (Kuttrolf)  
イタリア (ムラーノ)、16世紀  
後期～17世紀初頭

吹き及び型吹きソーダガラス、ラッ  
ティモ糸、  
高さ 23.9cm  
底径 7.2cm  
84.DK.661



前出の杯[23]同様、ヴェトロ・ア・レトルティとよばれる線条細工ガラス器の一種である。4世紀にシリアで作られた香水入れと見られる瓶を模した、風変わりだが優雅な形をしている。この型の瓶は15世紀にヨーロッパで見直され飲料水や酒類に使われることがあったらしいが、細くねじれた首のため注ぐのに時間がかかったり、しり漏りしやすかった。この器の名称「クットロルフ」は、ラテン語で水滴を表わす「グッタ」か、ドイツ語でうがいを意味する「クッテリング」から派生したらしい。耳をくすぐる心地よい音が食事の楽しさを盛り上げたことであろう。

25 法王クレメント8世の肖像  
(Ippolito Aldobrandini)  
イタリア (フィレンツェ)、1600-  
1601年

デザインはヤコポ・リゴッツィ  
(ヴェローナ、1547-1626年頃)  
ラヴォリ石細工所にて、ロモ  
ロ・ディ・フランチェスコ・フェ  
ルッチ作 (通称デル・タッダ、  
フィレンツェ、1621年没)

方解石、ラピス・ラズリ、螺鈿、  
石灰石、大理石  
台と周囲は黒方解石、ブロンズ鍍  
金枠

縦 (額込) 101.7cm

横 (額込) 75.2cm

縦 (額無) 97cm

横 (額無) 68cm

92.SE.67

古代ギリシアやローマで盛んに作られたモザイクは、ルネサンスのイタリアでその耐久性と独創性が賞賛され再び盛んになった。コメッシ[10, 19参照]と呼ばれるこの硬石と軟石の象嵌細工はメディチ家によって奨励され、特にトスカーナ領主フェルディナンド1世は地元の職人を集めて工房を創立し、賞賛された高度な象嵌細工の技術習得の場を提供した。コメッシによる肖像は極めて希少で、この作品は当時制作されたと知られる四点組のうち今日まで残った二点の一方に当たる。

記録により1601年にフェルディナンドが法王クレメント8世に寄贈した肖像であることが判明しており、16世紀末の姪マリーア・デ・メディチとフランス王アンリ4世の結婚にちなんだものである可能性がある。石の持つ輝きのためか法王の姿が神秘的に見えるが、石にはもともと力が宿っているとさえ信じられていた。また、法王の権限と高聖職位の象徴である三重の冠を付けた姿は、この人物が持つ力を更に強調している。











26 額入り建物景観図

パネル：南ドイツ、1630-1670  
年頃

ブラウシウス・フィステュラトル  
の工房（ミュンヘン、活動期  
1587-1622）

スカリオーラ（人造大理石細工）

縦 43.5cm

横 50cm

額：イタリア、1730-1740年頃

漆黒木枠にブロンズ鍍金細工

縦 73cm

横 67cm

92.SE.69



左の拡大図参照

南ドイツでスカリオーラが初めて開発されたのは16世紀末のことで、高価で手間のかかるピエトレ・デューレ象嵌の代用としてであった。焼石膏を粉末にし顔料と混ぜたものを湿った膠台に貼り付け、硬石や軟石の研磨した表面を模して磨きこむ手法である。

ここに描かれたイタリアの眺望（詳細は左図参照）は、16世紀や17世紀に版画にして出版された透視画や舞台背景のデザイン画をもとにしたものである。この作品と良く似た首都ミュンヘンを描いた飾り板を数々制作した、ブラウシウス・フィステュラトルとその追隨者の作風と密接な関連性が認められる。

制作後ほぼ1世紀経て、ここに見られる華麗な18世紀の額に収められた。この額の装飾はフィレンツェ出身の彫刻家でありデザイナーでもあった、ジョヴァンニ・バッティスタ・フォッジニ（1652-1725）を想起させる。1730年にクレメント12世として法王に任命されたロレンツォ・コルジーニ（1652-1740）の家紋が入っているが、彼自身が指定したのか、彼への贈答用に仕立てられたのかは定かでない。

27 脚付きグラス (Stangenglas)  
南ボヘミア、1600年

吹きカリ石灰ガラスにダイヤ尖頭  
彫り  
高さ 34.5cm  
口径 8cm  
底径 10.7cm  
84.DK.559



有像の描写が刻まれたグラスの逸品の一つであるこの作品には、特に淫らな主題が極めて精巧に繊細なまでに描かれている。片側には、楽譜を掲げ指揮棒を振る裸婦の後ろから、着衣の男が左手で女の胸をつかみ、まるで抱えた楽器のように女の身体に大きな弓を横に当てて引く姿がある。反対側には、ふさふさとした狐の尾を股間に挟んで立つ裸婦と、舌を出して女を見上げる犬がいる。このような主題は地元の出版物からの引用と見られ、性的暗示や象徴主義が流行った北ヨーロッパの作品には珍しいものではない。

「シュタンゲングラス」とは棒や茎を意味するドイツ語から派生したもので、細長い形状をよく言い表わしている。ビールを主に飲酒用に使われたものだが、飲酒と肉欲はよくある取り合わせだ。



28 ジョーク・グラス  
(Scherzgefäß)  
ドイツもしくはネーデルランド、  
17世紀

吹きカリ石灰ガラス、表面装飾と  
銀細工  
高さ 33.7cm  
84.DK.520.1-2



吹きガラスの傑作であるこの珍しいグラスは、こぼさずに中の酒を飲むことが、ほぼ不可能なようにデザインされている。人間の形をしたグラスの、頭部から開いた鼻まで通った管がストローの役割をする。少しでもこぼしたら満杯にしてやり直すというルールに、苦勞する飲み手の姿を見て楽しむのが目的だ。

人の型をしたジョークグラスは、これ以外には一例しか知られておらず、雄鹿などの動物、長靴、ピストル、男性性器、角を型取ったものがより一般的である。

29 蓋付立杯  
ドイツ、1631年  
マルクス・ハイデン  
(コープブルグ、活動期1618年以  
前-1664年以後没)

象牙の旋盤彫刻  
高さ 63.5cm  
91.DH.75

右の拡大図参照



旋盤にかけて様々な幾何学形状に整形した象牙品は、ヨーロッパの収集家を主に人気を集めた。この作品は、底に入った署名と日付からわかるように、この手法に卓越した象牙細工師でザクセン宮廷用の象牙装飾や調度品を手掛けたマルクス・ハイデンが、ザックスコープブルグのヨハン・カシミール公のために作ったものと見られる。

彫像と、それぞれ角度の違う回転軸の周りを回っているように見える像や抽象的なフォルムが組み合わさった、17世紀初頭の旋盤象牙彫刻の典型的な様式を見せている。珍しく後から付け加えられたらしい丸々とした子供の戯れる像が、さらに躍動感を加えている。たとえば、本体の支柱であるトランペットを吹く子供（詳細は右図参照）が腰を大きく振った像は、不安定な平衡感覚を煽っている。









- 30 カミーロ・ロスピーリオジの肖像  
イタリア、1630-1640年  
ジョヴァンニ・パッティスタ・カ  
ランドラ作（推定）（ヴェルチェ  
ッリ出身、活動地ローマ、  
1586-1644年）

陶器モザイク、鍍金の木枠  
縦（額無）62cm  
横（額無）48.5cm  
87.SE.132

この肖像モザイクには、法王クレメント9世（1600-1669）の兄弟のカミロ・ロスピーリオジが、聖ステパノ勲爵士の十字の勲章が入った服装で描かれている。17世紀初頭ローマきってのモザイク芸術家とされたジョヴァンニ・パッティスタ・カランドラは、当時の貴族や法王家に愛好家が多かった。

17世紀、モザイクは建築物の装飾のみならず絵画の「永遠の」複製品として喜ばれた。この作例は、アンドレア・サッキやグイド・レーニといった当時の画家が描いた肖像画を、カランドラが複写したものらしい。陶製の小片を巧みに寄せて、絵画的な奥行きと色調を再現し、精緻な肖像に仕上げている。薄物の襟を通して見える十字の描写など、まさに離れ業と言えよう。

31 飾り棚 (Toonkast)  
フランドル地方 (推定アント  
ワープ)、1630年頃

オーク、胡桃、ツゲ材に果樹材、  
アマランサス、キング黒檀、べっ  
この化粧張り  
高さ 210.2cm  
幅 158cm  
奥行き 74.5cm  
88.DA.10



建築物のような構えに優雅な彫像を配した創造的な飾り棚である。全体の形状は、デュ・セルソー、セバステアノー・セルリオ、ジョヴァンニ・ダ・ブレスシア、ポール・フレデマン・デ・フリース等が出版した建築理論に影響されたものらしい。彫像の方は、ルーカス・ファン・ライデン、クリスピン・デ・パッス・デ・アウテ、コルネリス・マッサイス、アルブレヒト・デュラー等の北ヨーロッパの絵画を想起させる。三つの「対神徳」のうち「信仰」と「希望」の擬人像が、それぞれの持物である十字架と錨を携えた姿で正面の開き戸に刻まれ、「慈愛」は幼児に乳を含ませる姿で中央の引出に彫られている。四本の女人像柱の後ろに奥まった戸棚には、五体の男女の胸像がそれぞれ角形の台座の上に飾られている。飲酒、音楽など快楽に興じる姿を描いた五胸像は五感を、四女人像柱は四季を表わしたものらしい。

五感の擬人像は貴重品の収納という世俗的な用途を象徴しているようだが、一方「対神徳」の擬人像は、キリスト教の教えをないがしろにした快楽は慎むよう暗示しているようでもある。



32 飾り戸棚 (Kabinettschrank)  
ドイツ (アウグスブルク)、  
1620-1630年頃

黒檀、梨材、オーク材、ツゲ材、  
胡桃、栗、大理石、象牙、準宝石、  
べっこう、ヤシ材、エナメル、  
細密画  
高さ 73cm  
幅 58cm  
奥行き 59cm  
89.DA.28



建築物のような構えと流線的な正面上部の飾りには、17世紀初頭にアウグスブルクで作られた戸棚の一種と類似した特徴が見られる。制作者は不詳だが、当時アウグスブルクきっての家具大工とされたウルリッヒ・バウムガルトネル (1579-1652) の作品の影響を受けた者である事は間違いない。多種に及ぶ装飾はそれぞれ専門の工匠の手によるものと推察されるが、判明している工匠はオランダ人彫刻家のアルベルト・ヤンス・フィンケンブリンクだけで、片側の果樹材の浮き彫りのいくつかは、ALVBと彼のモノグラムが入っている。

外観は抑制が効いた気品あるバランスと装飾を呈しながら、扉を開けると、あらゆる素材や手法を使って聖書物語、寓意、歴史、神話を描いた装飾豊かな引き出しや仕切りで、驚くほど混みいつている。「キリストとサマリアの女」や「フュリスとアリストテレス」など女性の力を扱った主題が目立つのは、警告的もしくは道徳的な訓示が込められていたのかも知れない。また、キリスト教の善行を賛えた宗教主題の装飾は、高価な収集品の収納と陳列という用途の世俗性に対し、訓告の意味もあったのだろう。

### 33 手水鉢

イタリア（ジェノヴァ在住のオランダかフランドル地方出身の銀工）、1620-1625年  
ベルナルド・ストロツィ（ジェノヴァ、1581-1644年）による図案

銀  
直径 75.5cm  
85.DG.81

右の拡大図参照



この手水鉢には、恐らくプルタルコスの「英雄伝」を出典とする「アントニウスとクレオパトラ」からの情景が描かれている。縁には、アントニウスがオクタウィアヌス、レピデウスと会見する三頭政治発足の場面、キュドノス川を登るクレオパトラが初めてアントニウスに遭遇する場面、饗宴、アントニウスの死の場面が描かれている。内部に極めて彫りの深い浮き彫りに別に鑄造された立体像も付け加えて描かれたのは、「アクティウムの海戦」であろう。中央（詳細は右図参照）には、イチジクの籠から毒蛇を掴み取るクレオパトラと駆け寄る侍女を描いた、クレオパトラの死の場面が浮き出されている。

これらの図柄は、ジェノヴァ出身の画家ベルナルド・ストロツィによる1625年前後のスケッチ（オックスフォードのアシュモレアン美術館）に忠実に基づいたものだが、人や動物の表現様式から、ジェノヴァ在住のオランダ人もしくはフランドル人の銀工が制作したことが窺われる。

この華麗な鑄造銀器は実用より装飾品として、恐らくすでに紛失した水差しと揃いで、見事な銀細工を見せたことであろう。当時の一般銀器としては、最も大きく重要な作例である。









34 サイドテーブル  
イタリア（ローマ）、1670年頃  
ヨハン・ポール・ショール  
（通称ジョバンニ・パオロ・テ  
デスコ）作（推定）  
（出身地インスブルック、活動  
地ローマ、1615-1674年）

ポプラ材に彫刻と鍍金  
高さ 170cm  
幅 225cm  
奥行き 85cm  
86.DA.7

この素晴らしいテーブルは極めて芸術的な彫刻のため、実用と言うよりはローマの某宅に飾られた自慢の品であったと見られる。根元を岩で固めた幹から枝葉や果実が勢い良く伸びた風に形取ったもので、枝には羽根を休める鷺の像があり、上部は大きな貝殻の形に彫られている。バロックらしい主題と寓意表現ではあるが、まだ解説されていない紋章的意味合いもあるのかも知れない。

多才な芸術家であったヨハン・ポール・ショールは、庭園、噴水、祭りの装飾、高級家具、教会調度品、装飾品のデザインを手掛け、1660年代は、ベルニーニの下でバチカンのサンピエトロ寺院の法王座の制作に従事している。晩年の作品は、流線的で躍動感のあるバロック様式のみならず、後に流行することになる空想上の遺跡や洞窟の眺望なども取り入れ、17世紀から18世紀への過渡期を先駆した観がある。彼が手掛けた馬車やベットなどの装飾彫刻や素描と様式が似通っていることも、このテーブルをショールの作とする根拠になっている。



35 パネル、十枚組の一点  
フランス（パリ）、1661年頃  
シャルル・ル・ブラン作（推定）  
（1619-1690年）

オーク材に彩色、鍍金  
縦 213cm  
横 79cm  
91.DH.18.1-.10



本作品を含む十枚揃いのパネルは、  
瀟洒な部屋の大掛かりな装飾の一  
部をなしていたものと推される。  
パリ近郊のヴォー＝ル＝ヴィコン  
トの館にあったパネルと類似性が  
あり、十枚のうち一枚にはこの屋  
敷の主人の控え室（現図書室）に  
現存するパネルと全く同じモチ  
ーフが描かれている。この屋敷  
の装飾はシャルル・ル・ブランの  
指揮下、そのアトリエを動員して  
遂行された。

ルイ14世がまだ若年期だった17  
世紀中期に、ル・ブランが貴族達  
の覇気を高めようと創作した、華  
麗な古典主義的後期バロック様式

のデザインを見せるパネルである。最も大型の四枚のパネルには、剛毅、賢明、節制、正義からなる「四枢要徳」の擬人像である、古典様式の衣服をまとった女性の座像を描いた楕円形のグリザイユが組み込まれている。







### 36 タピスリー

「ポルティエール・デュ・シャール・ド・トリヨンフ（注：凱旋車柄の帳）」

フランス（パリ）、1699-1717年頃  
ゴブラン製作所

ジャン・ド・ラ・クロワ（父）（1662-1712年、ゴブラン主宰）とジャン・ド・ラ・フェイ（1655-1730年頃）、もしくはジャン・スーエ（1653-1724年頃）の工房作

シャルル・ル・ブラン（1619-1690年）が考案し、ボードラン・イヴァール（父）（1611-1680年）が製作したカルトン

毛と絹、麻、現代麻裏地

縦 357.5cm

横 277.8cm

83.DD.20

ポルティエール（帳）は、戸口に掛けて外気の侵入を防ぐと同時にプライバシーを守るのに使われ、人目につく場所を占めるものだったため、王宮で紋章を表示するのに最適だった。この作例にも、凱旋パレードを行く戦勝杯に溢れた馬車上に、フランスおよびナヴァール国王の紋章が入っている。

1717年に王室調度品として収められた六枚の帳のうちの一枚で、今も当時の目録番号194が付いている。このデザインのタピスリーは1792年まで王宮で使われたもので、王家の保守的な好みを物語っている。

### 37 絨 毯

フランス（シャイヨー）、1665-1667年

サヴォンヌリー製作所、シモン・ルールデ（1595-1667年頃）とフィリップ・ルールデ（活動期1664-1670年頃、1671年没）の工房作

毛と麻、現代綿裏地

縦 670.5cm

横 440cm

70.DC.63



パリに近隣したサヴォンヌリー製作所は、絨毯、椅子カバー、屏風用パネルなど、トルコやペルシャなど中東の絨緞技術を模したからみのあるパイル織物の毛織物を専門に17世紀に繁栄し、主にフランス王家の調度品を請け負った。ここにあるのは、中世の万華模様を思わせる花模様にな大きなアカンサス（ハアザミ）葉文様を組み合わせた柄で、縁には、17世紀に中国から輸入された明陶器の典型である白地に青の陶器が描かれている。

# 38 文机

フランス（パリ）、1670-1675年頃

クルミ材とオーク材に象牙、黒檀、青く染色した角、アマランスの化粧張り、ブロンズ鍍金細工、スチール、現代シルクベルベット

高さ 63.5cm

幅 48.5cm

奥行 35.5cm

83.DA.21



上板が書見台としてもち上がり、脇の引き出しに筆記具が収められるようになった小型の文机である。1729年のルイ14世の遺産目録に、詳細にわたる記述が残っている。

残念ながら、制作者名もどこに置かれていたものかもわかっていない。ルイ14世の愛妾として有名なモンテスパン夫人用の離宮として1670年にヴェルサイユに建てられた、トリアノン・ド・ポルスレーヌの調度品として作られた可能性がある。この離宮は白と青の陶板張りで、家具のいくつかも「陶磁器風」の白地に青の彩色が施され、中国陶器の人気に代表される当時の東洋ブームを反映したものだった。この建物は1687年に取り壊され、後には大トリアノンが建てられた。

この文机は当コレクションで最も年代物のフランス製家具で、極めて希少な例である。



39 テーブル

フランス（パリ）、1675年頃  
ピエール・ゴル作（推定）（1620-  
1684年頃、1656年以前に名工）

オーク材にべっこう、真鍮、しろ  
め（錫と真鍮の合金）、黒檀  
ブロンズ鍍金と鍍金した木材に黒  
檀の引き出し

高さ 76.7cm

幅（閉めた状態）42cm

奥行き 36.1cm

82.DA.34



上板を開けると、天幕の下で茶会に興じるオリエンタル調の服装の三人の女性像が現れ、まさに茶を供するのに使われたこの三脚机の用途を表わしている。

ルイ14世の息子であるフランス王太子（1661-1711）のために作られたと見られ、建物で言えばフリーズに当たる脇の部分と台の計四か所に、由緒あるフランス王家の百合の紋章が入っているほか、折畳板には、王太子のイルカの徽章がべっこうで大きく形作られている。

この机と対の一点は、19世紀の初め以来、英国王室のコレクションに所蔵されている。







40 台付き戸棚

フランス（パリ）、1680年頃  
アンドレ＝シャルル・ブール（推  
定）（1642-1732年、1666年以前  
に名工）

オーク材にべっこう、真鍮、しろ  
め（錫と真鍮の合金）、角、黒檀、  
象牙の化粧張り、染色および自然  
木片の寄木細工、彩色鍍金した  
オーク材の彫像、インドジャボク  
材の引出

高さ 229.9cm

幅 151.2cm

奥行き 66.7cm

77.DA.1

左の拡大図参照



スペインのライオンと神聖ローマ帝国の鷲の上に、フランスの若い雄鶏が勝ち誇って立つ姿を描いた寄木細工の正面扉をはじめ、ルイ14世の凱旋を主題にした装飾が施されたこの戸棚は、フランスの勝利を決定した1678年のナイメーヘン講和条約調印を記念したものと見られる。

ヘラクレスとアマゾン族のヒッポリュテが支えた形の戸棚のブロンズ細工も軍事主題を扱ったもので、ルイ14世の肖像メダリオンの周りには戦勝杯が散らばめられている。

この戸棚と対の一点は、現在スコットランドのバックレウチ伯爵領のダラムランリッグ城に所蔵されており、元の所有者は判っていない。

- 41 台付き宝物箱一对の一点  
フランス（パリ）、1684年頃  
アンドレ＝シャルル・ブール  
（推定）（1642-1732、1666年以  
前から名工）

クルミ材とオーク材に、べっこう、  
真鍮、しろめ（錫と真鍮の合金）、  
角、糸杉、紫檀、黒檀の化粧張り、  
ブロンズ鍍金細工

高さ 156.6 cm

幅 89.9cm

奥行き 55.8cm

82.DA.109.1-2



これとよく似た宝物箱が1689年付けフランス王太子の目録に記載されており、それによ  
ると制作者はブールとなっている。台もブール作とされるが、18世紀末か19世紀になっ  
てから支えとして付けられたものだ。

この一对の宝物箱は宝石入れを意図したものらしい。台には秘密の仕切りが、そして  
ブロンズ鍍金の縦状の帯の裏には指輪用の小引出が隠されており、鍵を開けるとちょう  
つがいのところから垂れ下がって開く仕組みになっている。

この他にもしろめの土台の付いた宝物箱が、イギリスのマルボロ公爵邸ブレナム宮殿  
に所有されている。



42 長時計 (Régulateur)

フランス (パリ)、1680-1690年頃  
外杵、アンドレ＝シャルル・ブール (推定) (1642-1732年、1666  
年以前より名工)  
文字盤、アントワヌ・ゴドロン1世 (1640-1714年頃) の  
「Gaudron AParis」の銘

オーク材とクルミ材にべっこう、  
真鍮、しろめ (錫と真鍮の合金)、  
黒檀、漆黒木の化粧張り、ブロン  
ズ鍍金細工、金属エナメルの数  
字、ガラス

高さ 246.5cm

幅 48cm

奥行き 19cm

88.DB.16



クリスティアーン・ホイヘンスが1657年に発明した振り子時計の初期の作例である。振り子とおもりは長い箱状の胴体部に収まっていて、その中ほどは振り子の振り幅分膨らませてある。この様式の時計の正確さと不規則な太陽の軌道さえ表示する機能の精巧さは、文字盤の下に刻まれた、「太陽に嘘はつかせない」というヴェルギリウス「ゲオルギクス」からの引用句に語られている。

現在パリの国立上級美術学校が、これと同じ様式、象嵌模様の時計を所蔵しており、それはルイ14世の死亡時の財産目録に記載されている上、後年1792年の目録ではアンドレ＝シャルル・ブールの作と判明している。

43 テーブル

フランス（パリ）、1680年頃  
アンドレ＝シャルル・プール（推  
定）（1642-1732年、1666年以前  
より名工）

オーク材にべっこう、真鍮、しろ  
め（錫と真鍮の合金）、角、黒檀、  
象牙の化粧張り、染色木片と自然  
木片の寄木細工

高さ 72cm

幅 110.5cm

奥行き 73.6cm

71.DA.100

右の上板拡大図参照



木片ばかりを寄せたものと、べっこう、真鍮、しろめを使ったものの二種類の象嵌細工を施した家具はわずかしがなく、すべて同じ細工師の手によるらしく、同様なモチーフが数々見られる。このテーブルを始めすべて最高の技術で作られており、恐らくルイ14世か王室のために作られたものと見られる。これに似た机はルイ14世の目録にあるが、当美術館のものの詳細は不明だ。

象嵌装飾にある草花（詳細は右図参照）は、シャクヤク、ヒヤシンス、ラッパ水仙、チューリップ、キンボウゲなど全て識別できるものだ。







- 44 タピスリー、「中国皇帝史」シリーズより「天文学者」  
フランス（ボーヴェ）、1697-1705年頃  
フィリップ・ベアーグル（1641-1705年）の指揮下ボーヴェ製作所で制作  
図案はギルイ・ヴェルナンサル（1648-1729年）、ジャン＝バティスト・モノワイエ（1636-1715年）、ジャン＝バティスト・ブラン・ド・フォントネー（1653-1715年）

毛と絹、現代綿裏地

縦 424cm

横 319cm

83.DD.338



ルイ14世とモンテスパン夫人の嫡子トゥールーズ公（1678-1737）が作らせた十枚一組からなるタピスリーの一枚で、華麗な縁飾りにその紋章とモノグラムが入っている。中国の歴史を主題にした一場面で、地球儀の側に立つ口髭を生やした清の順治帝（在位1644-1661年）が傍に座ったあご髭をたくわえたアダム・シャル・フォン・ベル（1592-1666）と協議している様子だ。アダム・シャルは西洋天文学の知識を買われて清の宮廷に受け入れられたドイツ人イエズス会神父である。

大きな地球儀と卓上の天球儀はヨーロッパ製を見本にして中国で作られた物で、実物は今も北京の天体観測所にある。



#### 45 時計の試作品

フランス（パリ）、1700-1710年頃

テラコッタにエナメル細工の文字

高さ 78.7cm

幅 52.1cm

奥行き 24.2cm

72.DB.52



王室調度品の制作にあたっては、蠟もしくはテラコッタと染色した紙で小型の試作品が作られる事があったが現存例は少ない。これは実物大の試作品で、パリで作られた調度品見本としては最古のものとされる珍しいものだ。恐らくルイ14世のために、フランソワ・ジラルドン（1628-1715）あたりの宮廷彫刻家の一人が制作したものであろう。

文字盤の下には、四頭立ての馬車を馳せプロセルピナを掠奪するブルートが描かれている。時間と季節の移ろいの象徴として相応しい主題だが、同様な装飾を施した時計は他に知られていない。

46 タピスリー「Les Maisons royales  
(王宮)」シリーズより「12月、  
モンソー城」

フランス（パリ）、1712年以前  
ゴブラン製作所のジャン・ド・  
ラ・クロワ（所長、1662-1712  
年）の工房作

下絵はシャルル・ル・ブラン  
(1619-1690) の図案を基にゴブ  
ランの画家達による共作

毛と絹、現代木綿芯地、麻裏地  
右下角にジャン・ド・ラ・クロワ  
の署名「I.D.L. CROX」の織込

縦 317.5cm

横 330.8cm

85.DD.309

右の拡大図参照



時の移ろいを表現した美術品は中世の聖務日課に源泉をもつが、やがて世俗的なものに発展し、星座表と宮廷や田園の年間行事で表わした暦が、一揃いのタピスリーに仕立てられるようになった。その一例である「王宮」シリーズは、ゴブラン製作所で制作された最も独創的なタピスリーである。

一組十二枚のタピスリーには、それぞれその月と星座の印が入り、背景には王宮、中央にはルイ14世とその日常生活のひとコマ、そしてその手前には異国の鳥、動物、銀器、絨毯といった王の所蔵品の数々が描かれている。モンソー城（18世紀に取り壊し）を背景に王が猪狩を率いる姿がある12月の風物詩を表わしたこの作例は、王家ではなく個人の愛好家のために作られたものとされる。











47 机 (Bureau Mazarin)  
フランス (パリ)、  
1692年以後-1700年頃

オーク材とクルミ材にべっこう、真鍮、しろめ（錫と真鍮の合金）、銅、螺鈿、黒檀、染色した角と自然色の角、染色した紙、銀鍍金とブロンズ鍍金細工、鉄錠

上板に不詳の紋章（後年取り替えられた物）が、選帝侯冠の下に金羊毛勲爵士団章と首飾り章に囲まれ王冠をした獅子に支えられた形で入っている。

高さ 70.5cm

幅 89cm

奥行き 51cm

87.DA.77

左の上板拡大図参照



この小さな机の上板に入っている紋章は家紋自体は後年取り替えられた物であるものの、周囲の飾り章はバイエルン選帝侯の物が当時のまま残っている。選帝侯冠の下にある鉄錠にMEのモノグラムがくりぬかれており、これがマックス・エマニュエル（1662-1726）のイニシャルであることは確実である。この選帝侯は、1704-1715年のフランス亡命中に、このような豊かな装飾の調度品を愛好するようになり、彼の財産目録に多くの調度品について簡単な記述が残っている。

上板（詳細は左図参照）のデザインはジャン・ブラン（1640-1711）の様式で、当時の机やテーブルによく見られるものだが、多種多彩の材料を駆使したこの作例の華美さに勝るものはない。小さく華奢な机で、実用よりは単なる飾りとされたものらしい。

48 腰掛け (Tabouret)  
フランス (パリ)、1710-1720年頃

鍍金したクルミ材、現代皮張り  
高さ 47cm  
幅 63.5cm  
奥行き 48cm  
84.DA.970



腰掛け二脚、長椅子二脚、肘掛け椅子六脚からなる華麗な彫刻入り組椅子は、フランスの財務長官であった大資本家のピエール・クロザー（1661-1740）が誂えたもので、1740年の死亡時に作成されたパリのリシュリュー通りにあった邸宅の調度品目録に記述がある。近年クロザーの子孫が、このうち肘掛け椅子二脚をルーヴル美術館に寄贈した。

当美術館がこの腰掛けを購入した際は、鍍金が剥がれ元の皮張りがなくなっていたため、保存状態の良い他の椅子を手掛かりに漆喰と鍍金を修復し、アップリケ細工の皮張り（クリーム色と赤の絹のリボン使用）も複製した。





#### 49 メダル収納戸棚

フランス（パリ）、1710-1715年頃  
アンドレ＝シャルル・ブール作  
（推定）（1642-1732年、1666年  
以前より名工）

オーク材にべっこう、真鍮、黒檀  
の化粧張り、ブロンズ鍍金細工  
ピレネー産サランコラン大理石の  
上板

高さ 82.5cm

幅 140cm

奥行き 72.5cm

84.DA.58

元は22段の浅い引出がついたコインやメダルを収納する戸棚だったが、ある時点において内部が取り除かれ葉巻の適湿貯蔵箱に改造された。（サンクト・ペテルスブルクのエルミタージュ美術館所蔵のこれの対は、もとの引出を残している。）各扉中央に付いた仮面と、両端に付いたライオンを形どったブロンズ鍍金細工以外の装飾はこの戸棚独特のものである。正面に魔法の杖を持った商業の神メルクリウス（マーキュリー）を配したのは、コインやメダルを収納する戸棚に相応しい装飾と言えよう。

この一組は、国王に仕えた建築家ロベール・ド・コットの息子、ジュレ＝ロベールの1767年付死亡時遺産目録に記載されたものに該当するとされ、ブールがロベール（父）のために制作したと推察される。

- 50 三折屏風一對の一点 (Paravents)  
フランス (シャイヨ)、1714-1740  
年頃  
サヴォンヌリー製作所  
図案はジャン＝バティスト・ブ  
ラン・ド・フォントウネー (1653-  
1715年) とフランソワ・デポルト  
(1661-1743)

毛と亜麻糸、綿ラシャのうち紐、  
シルクベルベット、木枠  
縦 273.6cm  
横 193.2cm  
83.DD.260.1-2

右の拡大図参照



この背の高い三折屏風はパラヴァン（風よけの意）と呼ばれ、室内に居る人を冷たい隙間風から守るものだった。暖かい夏の日の木陰を思わせる図案は、18世紀を通して流行したもの。この一組は王室調度品の絨毯、長椅子カバー、屏風などを制作したサヴォンヌリー製作所[37参照]で作られたもので、さすがに耐久性がよくほとんど褪せることなく、本例に見られるようにほぼ元の色彩を保っている。









51 サイドテーブル  
イタリア（ローマ）、  
1720-1730年頃

リンデン材とトウヒ（エズマツ）  
材に彫刻と鍍金  
大理石に化粧板の現代上板  
高さ 93.9cm  
幅 190.5cm  
奥行 96.5cm  
82.DA.8

表情豊かな顔や四方を向いて見上げた女性頭像の数々で飾られたこの重厚なテーブルは、力強いローマ・バロック様式を見せている。一方、ロココ調への移行も、花飾りのドレープの断片、建物から切り取られた様々な部分がつなぎ合わされたようなモチーフ、自由自在にあしらったうず巻模様などに現れている。机の下空間には中央から四本の脚に向かって太くうねった接続部が伸びていて、その脚自体も曲がりくねって外側に向いている。

これと揃いのテーブルが、英国リンカンシャーのグリムソープ城とローマのバルベリーニ宮に存在している。グリムソープ城にあるのは1843年の夏にローマで入手されたものと判っているが、はたしてバルベリーニ宮のテーブルが元からそこにあったものかは不明だ。いずれにせよこの三点は、四点から六点程度からなる一揃いとして、18世紀にローマのある豪邸の大広間を飾ったものに違いない。



52 祭壇用燭台一對の一点  
イタリア（ローマ）、  
18世紀初頭

ブロンズ、部分鍍金  
高さ 83.3cm  
最大幅 29.8cm  
93.DF.20.1-2



上下両方向の曲線が組み合わせられた複雑なリズムが作り上げた、大胆で力強いフォルムを持った優雅な燭台である。台と胴部の中程に入っているのは、聖フィリッポ・ネリ（1515-1595）の象徴である炎のゆらめくハートと八手の星である。彼が打ち立てた祈祷や説教を主軸とし修道誓願を必要としないオラトリオ修道会は、1575年に法王グレゴリウス13世に正式認可されるに至った。宗教への打ち込みぶりが、胸から心臓が飛び出さんばかりの勢いだったと言われるこの聖人の象徴として、燃えるハートが好んで使われた。この一組の燭台も、これらの象徴から聖フィリッポ・ネリに捧げられた教会か礼拝堂の祭壇を飾っていたとされる。

このスタイルは、1714年に百通りの燭台その他のデザインをまとめて出版した、ローマのブロンズ鑄造などの金工、ジョヴァンニ・ジアルディーニ（1646-1722）の作風を想起させる。波打つ流動感ある形状には、ローマ・バロック盛期のファサードの曲線的デザインに通じる感覚がある。シンプルで力強い全体のラインを強調するために表面装飾を比較的抑えた点などから、この一対が建築家によるデザインであることが考えられ、金工の父と兄[58 参照]を持ち、祭壇調度品をデザインしたことで知られるフィリッポ・ユヴァッラ（1678-1736）あたりの作品と推察される。



53 サイドテーブル  
フランス（パリ）、1730年頃

鍍金したオーク材、ブレーシュ・  
ヴィヨレット（紫縞大理石）の上板  
高さ 89.3cm  
幅 170.2cm  
奥行 81.3cm  
79.DA.68

華麗な初期ロココ調のこの作例には、獅子頭、ドラゴン、大蛇、キメラという怪物などが流れるように連なった、典型的なロココ様式の豪華装飾モチーフが見られる。

小さなサイドテーブル二点と一揃いで、大きなサロンの、良く似た彫りが入ったパネルがはめられた壁に沿って置かれていたと推察される。壁際の装飾品は通常「ムニエズィエー・バーティマン（建具師）」の仕事で、当時の建具師組合の慣例により署名や刻印は入れてない。



54 地球儀一対

フランス（パリ）、

地球儀1728年頃

ジャン＝アントワヌ・ノレ  
神父（1700-1770年）の図をも  
とに、ルイ・ボールド（活動期  
1730-40年代）が地図を彫刻  
マルタン一族（エティエンヌ＝  
シモン、1770年没；ジル＝フ  
ランソワ、1795 没；ギヨーム、  
1749年没）が漆黒塗装（推定）

版画、混凝紙（張子材）、ハンノキ  
材にマルタンワニス、ブロンズ、  
ガラス

高さ 110cm

幅 45cm

奥行 32cm

86.DH.705.1-.2



この地球儀は1728年の日付で、ノレ神父がルイ14世とモンテスパン夫人の嫡子の妻、メイン皇太子妃（1676-1743）に献上する旨の銘が入ったカルトゥーシェが付いている。教師であるとともに名高い科学者であったノレは、1758年に王家の子供達の物理と自然史の教師として招聘された。対の天球儀の方は1730年の日付で、皇太子妃の甥のクレールモン侯（1709-1771）に献上されたものだ。

海図になかった領域も新たに地図に書き込まれ、新貿易路が確立されつつあった時代、地球儀は貴族の図書室には欠かせぬ、高尚な学問の香を漂わせるものだった。よく18世紀の肖像画に描かれている地球儀は、通常簡単な旋盤彫刻の支柱の上に置くかはめ込んだものだが、このように赤や黄色の漆塗で東洋の情景を描いた装飾付きの台を持つ作例は、非常に豪華なもので、同じような漆塗りを施した家具に合わせて眺められた物と推察される。

55 コモード

フランス（パリ）、1735-1740年頃  
シャルル・クレッサン作（推定）  
（1685-1768）

マツとクルミ材にボワ・サティネ  
とアマランスの化粧張り  
ブロンズ鍍金細工、プレーシュ・  
ダルブ（紫縞大理石）上板  
高さ 90.2cm  
幅 136.5cm  
奥行 64.8cm  
70.DA.82



サン＝リュック・アカデミーで彫刻を学んだシャルル・クレッサンは、ブロンズ鍍金細工のデザインもこなし自身の工房で制作したが、これは鑄造業とブロンズ細工業の分離を定めた当時の組合による取り決めに違反していた。そのためたびたび罰金を課せられた彼は、支払のため手持ちの作品を売り払うことを余儀なくされ、今もその品目カタログが残っている。1756年のカタログには、「132番、高さ90センチのコモード、プレーシュ・ヴィヨレット大理石、かぎたばこを身体に振りかけているサルを子供のかぎたばこ泥棒二人が囲んでいるブロンズ鍍金細工付き」と記述がある。

仕上げから約20年を経てまだクレッサンの手元にあったとはよほど売りあぐねたとみえ、同じデザインで複数制作されたコモードも数々あるのに、これと全く同じものは一点も見つかっていない。



56 壁掛け時計 (Pendule d'Alcove)  
フランス (パリおよびシャンティイ)、1740年頃  
時計はシャルル・ヴォアザン作  
(1685-1761年、1710年に名工)  
枠はシャンティイ製磁器所

軟磁器、多彩エナメル装飾、ブロンズ鍍金細工、金属エナメルの文字盤、ガラス時計カバー

縦 74.9cm

横 35.6cm

奥行 11.1cm

81.DB.81



この軟磁器製時計枠が作られたシャンティイ製磁器所は、1725年にコンデ王子が創始したもので、元々コンデの膨大なコレクションにある日本製陶器の影響を受けたデザインの陶磁器を製造していた。しかし1740年代には、異国風モチーフをヨーロッパ的に奇抜に解釈したデザインのものをもっぱら製造するようになった。この釉の色はシャンティイ独特のものである。

寝室のアルコーブ用に設計された時計で、紐を引くと次の15分間隔の時刻を告げるチャイムが鳴る仕掛けで、暗闇で蠟燭をつけて文字盤を見る手間を省いたものだった。

57 肘掛け椅子四脚揃いの一脚  
イタリア（ヴェネツィア）、1730-  
1740年頃

クルミ材とマツに彫刻と鍍金、  
ジェノア製現代ベルベット張り  
高さ 140cm  
幅 86cm  
奥行 87cm  
87.DA.2.1



この椅子の制作者は不詳だが、偉大な家具彫刻家アンドレア・ブルストロンの様式を継いだアントニオ・コラディーニ（1700-1752）作の家具の様式と酷似している。当時の新鋭コラディーニは、18世紀初頭にヴェネツィアの公艇の装飾を請け負ったことで良く知られる。ヴェネツィアのコレール博物館が所蔵するこの儀式艇の残存部分から、コラディーニが同地レッツォニコ宮にある数々のコンソールテーブルや脇椅子、テーブル、王座の制作者であることが判明した。この肘掛け椅子にはレッツォニコ宮の椅子の均整の取れた優雅さや、流線的な渦巻文、花輪飾り、葉文などを組み合わせて円形に彫り出した見事な彫刻に通ずるものがある。

この椅子に見られる華麗さと上品さを合わせ持った形状は、18世紀中葉の重厚なバロック様式から優雅で官能的なロココ調への移行期の特徴と言えよう。質の高い彫刻と鍍金細工からして、この豪華な肘掛け椅子が実用品であったと同時に装飾品でもあったことが窺われる。



58 壁飾り

イタリア（シチリア島）、1730-1740年頃

フランチェスコ・ナターレ・ユヴァッラ（1673-1759年）作

銀、ブロンズ鍍金、ラピス・ラズリ  
高さ 70cm  
幅 52cm  
85.SE.127



金匠のピエトロを父に、建築家のフィリッポ[52参照]を弟に持つフランチェスコ・ユヴァッラは、優れた神事用具の金匠として定評があった。彼が手掛けた壁飾り、祭壇<sup>おほ</sup>蔽い、聖体顕示台、聖杯が、かつてローマならびにシチリア島にあった多くの教会の内装に趣を添えた。この「無原罪の御宿りの聖母」を表わした壁飾りには、罪の象徴である蛇を踏み付けた聖母が、天使の頭像に囲まれて描かれている。小型の工具で繰り返し型押しした空間に、線条を入れた雲を配し輝きを抑えた背景に、磨き澄まされて光輝く聖母と天体が際立っている。この異質な地合を利用した対照の妙が、中心に据えた浮き彫りメダリオンに、豊かな細工と彩りのある額に劣らない装飾性をもたらししている。

ユヴァッラは同様にラピス・ラズリと貴金属を額に使った同寸法の壁飾りをもう一点作製している。それには聖母子と聖ヨハネが描かれており、記録に残る最後の所有者はナポリのピエドモント皇太子だった。マリアをキリストの母として賛えたこの二点の銀細工は恐らく対かもっと大掛かりな装飾の一部として、教会か個人の礼拝堂に飾られていたものと見られる。





59 整理棚（Bout de Bureau）と時計  
付きファイル戸棚（Cartonnier）  
フランス（パリ）

整理棚とファイル戸棚、1740年頃、ベルナール・ヴァン・リザンブール2世（1696年以後出生-1766年頃没、1730年以前より名工）の印「BVRB」

時計、1746年頃、文字盤と作動部にエティエンヌ・ル・ノワ（1699-1778年、1717年に名工）の署名「Etienne Le Noir A Paris」、文字盤裏にエナメル細工師ジャック・デクラ（1742年頃から活躍、没1764年以後）の銘「.decla.1746」  
時計外枠の制作者は不明

オーク材に漆黒ハンノキ、マルタンワニス、ブロンズ鍍金細工、彩色ブロンズ像、エナメルおよび彩色金属文字盤、ガラスの時計カバー

高さ 192cm

幅 103cm

奥行 41cm

83.DA.280

左の拡大図参照



この戸棚は今日のファイルキャビネットにあたり、上の扉無しの棚には皮表装のボール紙製書類箱が収められるようになっている。揃いの文机がこの前に置かれたのであろう。

金色と黒のマルタンワニス（東洋の漆塗り）をまねてフランスで作られたもので、その名人のマルタン兄弟にちなんでこの名がついた。唐人像（左図参照）もマルタン兄弟の手によるものであろう。

- 60 壁掛け時計 (Pendule à Répétition)  
フランス (パリ)、1735-1740年頃  
時計本体に時計職人ジャン＝ジャック・フィエフェ(1700-1770年頃、1725年より名工)の刻印「Fieffé AParis」、文字盤に「FIEFFE DELOBSERVATOIR」の書込  
外枠の制作者は不明

ブロンズ鍍金、金属エナメル製文字盤、ガラスカバー、オーク材の裏板  
高さ 133.4cm  
幅 67.3cm  
奥行 14.4cm  
72.DB.89



この時計の彫刻に表わされた「時を征服する愛」は、当時のフランス製の時計の装飾によくあった主題だ。征服された「時」は地球儀、分度器、コンパスの傍らに横たわり、それを見下ろしながら二人の天使が「時」の持ち物の草刈り鎌と砂時計を持ち去っていく。「パンデュル・ダルコープ」[56参照]とも知られるこの種の時計は、寝室の壁のくぼみ部分に収まるよう小型のものが通常で、異例に大きなこの時計は極めて壮大な寝室のために作られた物に違いない。

随所で渦巻き完全に左右対称性を否定した典型的なロココ調のデザインは、装飾彫刻師のジュスト＝オレル・メッソニエ(1695-1750)の作と推定できる。





61 コモード  
フランス（パリ）、1745-1749年頃  
ジャン＝ピエール・ラッツ作  
（推定）（1691-1754年頃）

オーク材にボワ・サティネの化粧張り、ブロンズ鍍金細工、フルーレ・ド・ベシェ大理石上板  
ブロンズ細工に1745-1749年を示す冠付きのCの印

高さ 87.7cm

幅 151.5cm

奥行 65cm

83.DA.356

ローマのクイリナーレ宮に現存するこれと全く同じデザインのコモードに、ラッツの刻印が入っていることから、この作例には刻印はないもののラッツの作と断定できる。ローマのコモードは、スペイン王フェリペ5世の息子でパルマ領主のフェリペ侯に嫁いだ、ルイ15世の娘ルイーズ＝エリザベットによって1753年にイタリアに渡った。

主に寄木細工を専門としたラッツの技術には定評があった。化粧張りにくっきり浮き出た波状の木目模様は、18世紀中葉のフランス製家具には極わずかししか見られない珍しい様式である。これは非常に複雑な寄木細工で、丸太を斜めの輪切りにしたものを木目が波を描くよう入念に組み合わせて出来ている。



- 62 コモード一对の一点  
 ドイツ（ミュンヘン）、1745年頃  
 ヨアヒム・ディエトリッヒによる彫刻（推定）（1753年没）  
 フランソワ・ド・キュヴィリエ  
 （1695-1768年頃）の版画を基に  
 した脇板のデザイン

この一对のドイツ製コモードの彫刻装飾には、ロココ様式の第一人者でありバイエルン選帝侯マックス・エマニュエル（1662-1726）付きの建築家であった、フランソワ・ド・キュヴィリエの版画の影響が見られる。白無地に透かしの入った鍍金装飾の組み合わせは、かつてこれが置かれた所の内装に合わせたものらしい。当時のフランス様式のブロンズ装飾とは対照的に、ドイツの家具職人は木彫りの装飾を施している。

マツ材に彩色、鍍金した漆喰、ブ  
 ロンズ鍍金細工  
 ジョーヌ・ロゼ・ド・ブリニョール  
 大理石の上板  
 高さ 83.2cm  
 幅 126.4cm  
 奥行 61.9cm  
 72.DA.63.1-2



63 戸棚一对の一点

フランス（パリ）1745-1750年頃  
ベルナール・ヴァン・リザンブ  
ール2世（1696年以後出生-1766  
年頃没、1730年以前より名工）  
の印「BVRB」

オーク材にボワ・サティネ、アマ  
ランス、サクラ材化粧張り、プロ  
ンズ鍍金細工

高さ 149cm

幅 101cm

奥行 48.3cm

84.DA.24.1-2



この一对の低い戸棚は独特の形で、小型美術工芸品（磁器やブロンズ細工など）や、珍しい採集品（貝殻、珊瑚、鉱岩など）の収納を目的としたものと見られる。上の扉のすぐ下に収まった棚板は引き出せるようになっていて、これらの品を観察したり整理したりする台として使われたらしい。啓蒙時代全般にわたって、ヨーロッパの裕福な階級の間では、美術品や珍品の収集と研究が盛んだった。

上の網戸は近年付け替えられたものだが、18世紀のこの種の戸棚には、ガラスのかわりにこのような網戸がはめ込まれたものが多い。

- 64 一対の磁器製置き物「ペルセウスとメドューサ」の一点  
イタリア（フィレンツェ）、  
1749年頃  
ドッチャ陶磁器工場  
ジョヴァンニ・バッティスタ・  
フォッジニ（1652-1725年）作  
のモデルを基にガスペロ・ブル  
スキ（1701-1725年）が仕上げ、  
ヨハン・カール・ヴェンデリン・  
アンレイター・フォン・ツィルン  
フェルド（1739-45年ドッチャ  
で活動）の工房で色付け

磁器に彩色、部分鍍金  
高さ 35cm  
幅 29cm  
奥行 20.1cm  
94.SE.76.2



右の拡大図参照

オヴィドゥスの「転身物語」にある、ペルセウスがメドゥーサの寝込みを襲い、一度目が合えば死に至るというメドゥーサの眼差しを避け、磨いた楯に映った姿を頼りに斬り殺した場面が主題である。四隅の小さい壺が蠟燭立になっていて、さぞかし食卓にドラマティックな演出効果を加えたことであろう。

元々このデザインは、18世紀初頭のフィレンツェで活躍した有力な彫刻家ジョヴァンニ・バッティスタ・フォッジニが、ブロンズ彫刻の塑像として制作したものだ。1725年彼の死去に伴い、残された塑像のほとんどが息子で彫刻家のヴィンセンツォの手に渡り、その後いくつかがドッチャ陶磁器工場に譲られ、初期の単体および群像の置き物のもとにされた。

デリケートで宝飾品のような多色エナメル染色の技術と様式は、ウィーン出身の鍍金細工師で陶画家の、アンレイター・フォン・ツィルンフェルドのものだ。彼は、1737年にカルロ・ジノリにドッチャ工場の主幹陶画家として迎えられるまで、ウィーンのC. I. ドゥパクイアの陶磁器工場で働いていた。





65 ケース付き顕微鏡

フランス（パリ）、1749年以後  
測微計発明はミシェル・フェル  
ディナン・ダルベール・ダイイ、5  
代目ショールネ公爵（1714-1769  
年）  
ブロンズ鍍金細工はジャック・  
カフィエリ作（推定）（1678-  
1755年）

ブロンズ鍍金、エナメル、シャグ  
リーン革、ガラスとミラーガラス、  
型押しと鍍金をした革ケース、真  
鍮、ベルベット、透かし及び鎖状  
の銀細工、自然物標本のスライド  
と真鍮用具  
（顕微鏡）

高さ 48cm

幅 28cm

奥行 20.5cm

（ケース）

高さ 66cm

幅 34.9cm

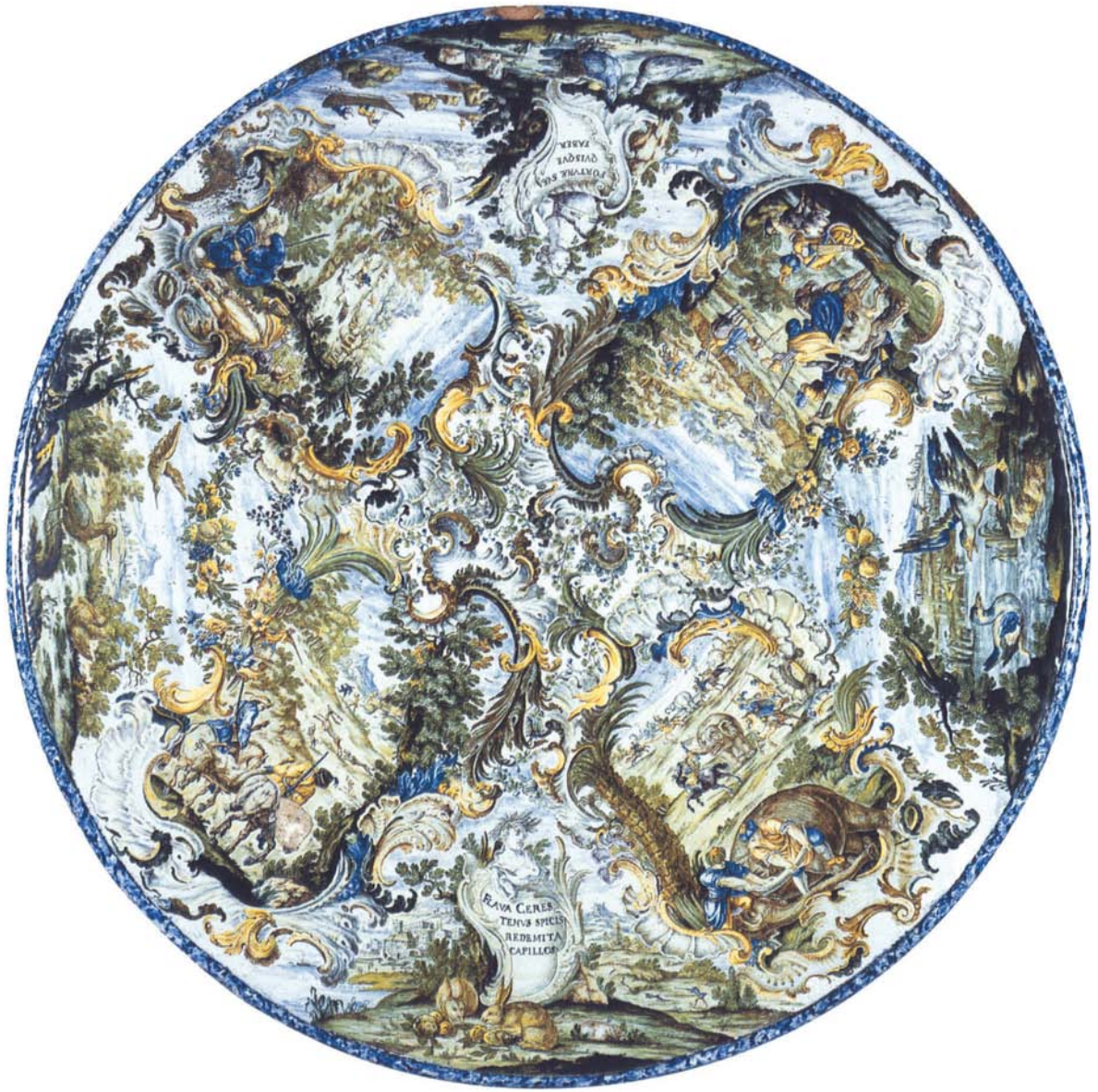
奥行 27cm

86.DH.694



この顕微鏡を見ると、18世紀フランスで美術と科学がいかに密接に結びついていたかが良くわかる。ブロンズ鍍金の台は当時の流行を映したもので、機器は当時の先端技術を取り入れ顕微能力と質を画期的に改善した測微計だ。宮廷や科学院に所属した貴族階級の素人科学者のために作られた機器の多くがそうであったように、この型押しした革ケース付きの顕微鏡にも、台を作ったブロンズ細工師やケースを縫製した製本職人らの名人技が光っている。ルイ15世所蔵のこれと同型の顕微鏡は、ミュエット城の観測所に置かれていた。





66 テーブル上板  
イタリア（カステッリ）、1760  
年頃  
フランチェスコ・サヴェリオ2  
世・マリア・グルエ（1731-1799  
年、ナポリ出身、カステッリ在住）

錫釉陶器  
厚さ 3.2cm  
直径 59.7cm  
86.DE.533

18世紀のイタリア製マヨリカ陶器のテーブル上板の比類はほとんどなく、希少な作例である。緑と黄緑を主体にしたロココ調の彩色はグルエ工房の作品の特徴で、アブルッツィ地方カステッリにおける彩色マヨリカ陶器の流れを組むものと見られる。有名なグルエ一族の最後の継承者であるサヴェリオは、風景や風俗画を専門にデッサンのような緩い筆致の陶画を特徴とした。この作例に見られるカルトゥーシュや入り組んだ植物文は、自由な自然主義的モチーフや華麗な流線フォルムが強調された、18世紀の装飾様式を端的に表わしている。人を魅了する繊細な牧歌的風景はむろん、象狩や駝鳥狩をするムーア人など異国情緒溢れる情景も、18世紀中葉の典型的なロココ趣味である。装飾的なカルトゥーシュを枠に狩猟を描いた四場面のうち、モノグラムが入った二場面は、アントニオ・テンペスタ（1555-1630）の版画に基づいたものだ。前景にある二枚の楕には「金髪のケレス（豊穡神）、その髪は穀物の冠に絡む」「幸運は自分で作るもの」を意味するラテン語の銘文が入っている。

- 67 蓋付深皿、受皿、台  
フランス（パリ）、1744-1750年  
トマ・ジェルマン作（1673-1748  
年、1720年より名工、1723-1748  
年に国王付金匠）

銀

大司教の紋章とタッセル、それを  
囲んでイエスキリスト修道会の首  
章と十字架が刻まれていたが部分  
的に削去され、後の所有者、二代  
目キャリングトン領主、ロバート・  
ジョン・スミスの紋章と取り替え  
られた。

（深皿）

高さ 30cm

幅 34.9cm

奥行 28.2cm

（台）

高さ 4.2cm

幅 46.2cm

奥行 47.2cm

82.DG.13.1-2



台と蓋のついたこの大きな深皿とその対は、贅沢な銀食器揃いの一部であったと見られる。台に刻まれた家紋自体は取り替えられたものの、ブラガのポルトガル人大司教であったドン・ガスパール・デ・ブラガンサ（1716-1789）の物と見られる紋章が今も残っている。18世紀中葉、有名なフランス人銀工で最高の技術と定評のあったトマ・ジェルマンとその息子のフランソワの顧客には、裕福な聖職高位者や宮廷人が名を連ねていた。

野菜や甲殻類を形取った蓋の取っ手は、一部が実際の生物を型に鋳造されたものだ。そんな細部の写実表現は、素人科学者や採集家が多かったトマ・ジェルマンの愛好家に喜ばれた。

- 68 壁掛け燭台、四点組の一点  
フランス（パリ）、1756年  
フランソワ＝トマ・ジェルマン  
（1726－1791年、1748-1764年  
に国王付金匠）

ブロンズ鍍金

「FAIT PAR F.T.GERMAIN.SCULP.ORF.DU  
ROI AUX GALERIES DU LOUVRE.1756」

の刻印

高さ 99.6cm

幅 63.2cm

奥行 41cm

81.DF.96.1-4

1756年にパリのオルレアン公の宮殿用にフランソワ＝トマ・ジェルマンが制作した八点揃いの燭台の一つ。リボンで束ねた月桂樹の枝のデザインは、当時内装の改造を担当した建築家のピエール・コンタン・ディヴリーが創作した可能性がある。この燭台が宮殿の壁に掛かった様子を描いた版画が、ディデロとダレンバールが編纂した1762年版の百科事典に掲載されている。

かなり大きな燭台ではあるが、彫金やつや出しの細部に宮廷付き金工の腕前が発揮されている。八台のそれぞれに微妙な違いがあり一つも重複した型はない。

18世紀後半に国王の所有となり、コンピエーヌ城内のマリー・アントワネットの住居に掛けられた。







69 サイドテーブル  
イタリア（シチリア島）、  
18世紀中葉

リンデン材に銀鍍金、石灰石の上板  
高さ 104cm  
幅 183cm  
奥行 78cm  
95.DA.6

畝があるため木彫というより引き伸ばした鉛のように見える曲線を描いた横木、二股に分かれた脚部、縁付の大きな脚先、透かし彫りのカルトゥーシュなど、極端なまでにロココ様式を展開した見事なテーブルである。上脚部の張り出しと下の横木の引っ張りの兼合に、ロココ調らしい左右対称を避けた装飾も相まって、際立った躍動感を感じさせるフォルムである。装飾によって助長こそすれ損なうことなく構造を強く前面に出しているのはイタリア様式の本髄である。

この銀鍍金のテーブルは、かつて黄色がかった光沢を帯び、金を模したものであったとも推される。金が高価であったことや貴金属の入手が困難であったことから、南イタリアでは家具に金を使うことはほとんどなく、このようにアルジェント・メッカートと呼ばれる「貧者の鍍金細工」を施したものが多かった。木彫りを厚く漆喰で被って銀を施し、メッカと呼ばれる暖色系の磨きをかけることで、金に似た光沢を持った木製家具を作りだしたのだ。



- 70 聖ヨセフと幼子キリスト  
イタリア（ナポリ）、1790年代  
ジェナッロ・ロウダト作（推  
定）（1790年代に活動したと  
知られる）  
塑像はジウゼッペ・サンマル  
ティーノ（1720-1793年）

多色テッラグリア（施釉白地陶器）  
高さ 54.3cm  
91.SE.74



タラント聖堂内サン・カタルド礼拝堂にある、ナポリ出身の彫刻家ジウゼッペ・サンマルティーノが1790年頃彫った等身大の大理石彫刻像と同じ主題と構成を持つ。サンマルティーノは通常大型彫像を制作する際テラコッタで試作モデルを作ったが、この陶人形はそうした試作の一つを模したものらしい。ジェナロ・ロウダトについては、1790年代にかけてナポリで活躍したらしいことと、サンマルティーノに師事していたらしい事以外ほとんど知られていない。大英博物館の「聖母子像」、ナポリの個人蔵の「トビアと天使」、ナポリのカポディモンテ美術館蔵の「キリストの磔刑像」を始め幸い署名が入ったいくつかの作例を参考に、これがロウダトの作であることが判明した。

繊細な表情、劇的かつ気品ある動きとポーズ、力強く波打った衣と髪など細やかな造形に、宝石のように輝く色彩が映える作品である。







71 隅戸棚

フランス（パリ）、戸棚 1744-1753  
年、時計 1744 年

ジャック・デュボワ（1694-1763  
年、1742年に名工）の「LDUBOIS」  
の刻印

ニコラ・ピノー（1684-1754年）  
のデッサンに基づく

時計本体はエティエンヌ・ル・ノ  
ワ2世作（1699-1778年、1717年  
に名工）、エナメル文字盤はア  
ントワーヌ＝ニコラ・マルティ  
ニエール作（1706-84年、1720  
年に名工）

オーク材、マホガニー材、トウヒ  
材にボア・サティネとシタン材の  
化粧張り

金属エナメルの文字盤、ブロンズ  
鍍金細工、ガラスカバー

高さ 289.5cm

幅 129.5cm

奥行 72cm

79.DA.66

左の拡大図参照



フランスの建築家で装飾師のニコラ・ピノー（1684-1754）のデッサン（後に版画）に基づいたこの隅戸棚は、ロココ様式の先駆と言える。しかしこの大きさと華麗さはパリ好みではなく、ポーランドのヤン・クレメンズ・ブラニッキ将軍（1689-1772）がワルシャワの商人ルリエールを介して、1744年（文字盤裏にエナメルで記入された年号）から1753年あたりにかけて、パリのジャック・デュボワの工房で作らせたものだ。ブラニッキ将軍の屋敷では、大広間の大きなタイル張りストーブに添って設置された。



## 72 机

フランス（パリ）、1750年頃  
ベルナール・ヴァン・リザンブール2世（1696年以後生-1766年頃没、1730年以前に名工）の印「BVRB」

オーク材とマホガニー材にユリノキ材、シタン材、ボワ・サティネ化粧張り、ブロンズ鍍金細工

高さ 107.8cm

幅 158.7cm

奥行 84.7cm

70.DA.87

印章のイニシャルからBVRBと知られる家具職人、ベルナール・ヴァン・リザンブール2世が得意とした寄木細工のある机である。立体的なブロンズ鍍金細工から木の葉や蔦が芽生えているかのような模様の寄木細工で家具を彩るのを特徴とした。

左右の筆記台を下ろすと中は両側が引出と整理棚になった、珍しい二面の机である。BVRBは数多くの家具を作ったが、それぞれが趣の異なった創意に富んだものだ。流行に敏感な顧客に次々と（高価で）新たなスタイルを提供するのに熱心で、新素材、新型の家具を続々と注文してくる家具商人を専ら相手に仕事をした。





73 コモード  
フランス（パリ）、1750年頃  
ヨーゼフ・バウムハウアー作  
（推定）（1772年没、1749年頃  
から国王用達木工）

オーク材に黒檀の化粧張り、日本  
製漆塗のはめ板、マルタンワニス  
ブロンズ鍍金細工、カンパン・メ  
ランジュ・ヴェール 大理石上板  
高さ 88.3cm  
幅 146.1cm  
奥行 62.6cm  
55.DA.2

このコモードはヨーロッパの人々が抱いた東洋からの渡来品への憧憬と、外国製品をフランス風に変容させるパリ気質を表わす良い例だ。厳としてフランス様式を守りながら、シノワズリー（中国風の）様式の装飾が施されている。日本から輸入された漆塗の箆筒から取り外した三枚のパネルをはめ込み、継ぎ目は細かに彫りを入れた重厚な鍍金細工で被ってある。残りの部分は、パリで施されたマルタンワニスとして知られる模造漆塗りの表面仕上になっている

制作者の印章はないが、売り主であるパリの高級品店「オー・ロワ・デスパリーニュ」の経営者シャルル・ダルノーの商標が二か所に入っている。

74 文 机

ドイツ（ノイヴィート・アム・ライン）、1760-1765年頃  
アブラハム・レントゲン（1711-1793年）作

マツ材、オーク材、クルミ材にブラジルシタン、ハンノキ、シマセンダン、黒檀、象牙、螺鈿の化粧張り、鍍金金具

上板に、大司教の紋章と大司教兼トリーア選帝侯で皇族のヨハン・フィリップ・フォン・ヴァルデルドルフ（1701-1768）のモノグラム「JPC」の象嵌

高さ 76.8cm

幅 71.7cm

奥行 49.8cm

85.DA.216



畳んだ状態ではごく簡単な机に見えるが、開くと多目的に使える複雑な仕組みになっている。上部は持ち上げて開ける浅い棚が付いていて、高さや角度の調節が出来るようになっており、下部は蝶番で繋がった二か所の仕切りそれぞれに、八つの小引出が収まっている。

神聖ローマ帝国のヴァルデルドルフ王子は、ドイツの家具職人アブラハム・レントゲンの上得意で、1750年代から1760年代にかけて二十を超える家具を注文した。



75 書物机兼化粧台

フランス（パリ）、1754年頃  
ジャン・フランソワ・ユバン  
（1721-1763）の刻印「J.F.OEBEN」  
（名工1761）

オーク材にユリノキ、シタン、アマランス、ツゲ、ヒララギ、カエデ、ナシ、サテンウッド、レモン、アンボイナ材、染色したシデおよびカエデ材の化粧張り  
革、絹裏地、ブロンズ鍍金細工  
高さ 71.1cm  
幅 80cm  
奥行 42.8cm  
71.DA.103



寄木細工と可動式仕掛けがユバンの家具の特徴だが、この小机もその両方を兼ね備えている。上板を後ろにずらして開けると、本体には取り出し可能な引出が内蔵されている。内部は青い絹張りの仕切になっている。引出の上板もボタンを押すと外れるスライド式で、粗目の木に見えるように染め型押しし周囲をブロンズ鍍金のユリの花で飾った革パネルを、格子状の寄木細工で囲ったものだ。側面にも寄木細工が施され、稀に見る瀟洒な作品である。

ユバンの顧客だったボンパドゥール夫人を娘のアレキサンドリーヌと共に、フランソワ・ゲランが描いた肖像画の中に、これに酷似した机が見られる。この肖像画はアレキサンドリーヌが死去した1754年以前に描かれたはずで、絵にある机は当美術館のものか類似のルーヴル美術館所蔵の机であろう。

76 壺一對の一つ

(Pots-Pourris Fontaines もしくは à Dauphin)

フランス (セーヴル工場)、1760 年頃

ジャン・クロード・デュプレシ (1774 年没、1745/48-1774 年にセーヴル美術部長) によるデザイン (推定)

シャルル・ニコラ・ドダン (1734-1803) の陶画 (推定)

軟磁器、ラピスブルーの地にピンクとグリーン、多色エナメル細工、鍍金。中心部の底に青で L 二文字を十字に重ねたセーヴル工場章

高さ 29.8cm

幅 16.5cm

奥行 14.6cm

78.DE.358.1-2



王立セーヴル工場の職人ならではの技巧と名人芸が発揮された、複雑な形状と装飾を持った壺である。本体に描かれた幾筋もの水の流れとしぶきの模様から、ポプリ・フンテーンと名付けられたこの壺は、中央の盛り上がった部分はポプリ入れ、本体は球根咲きの花やブロンズ鍍金の茎に陶器の花が付いた造花などを活ける花瓶としてできている。

この一対はルイ 15 世の寵妃ボンパドゥール夫人の調度品で、1764 年の死亡時の目録によると、夫人のパリの住居 (現エリゼ宮) の暖炉の上に置かれ、陶製壁掛け燭台および「舟形器」(ルーヴル美術館蔵) と一揃いをなしていた。



77 蓋付ポブリ壺

(Vase もしくは Pot-Pourri Vaisseau à Mât)

フランス (セーヴル工場)、1760年頃

ジャン・クロード・デュプレシ (1774年没、1745/48-1774年セーヴル美術部長) のデザイン (推定)

シャルル・ニコラス・ドダン (1734-1803年) 作の陶画 (推定)

軟磁器、ピンクとグリーンの地に、多色エナメル細工、鍍金。底に青でL二文字を十字に重ねたセーヴル工場章

高さ 37.5cm

幅 34.8cm

奥行 17.4cm

75.DE.11



このような舟形器はセーヴル陶器のうちでも賞賛されたデザインの一つで、1757年から1764年にかけて制作された。当時のセーヴル陶器では最も大きいものに属し、進んだ焼成技術を窺い知ることができる。正面の彩色陶画はダヴィッド・トゥニエール (子) (1610-1690) の絵画をル・バーが版画にした「フランドルの宴」をもとに描かれた。それぞれの舟形器には違った装飾が施されており、他の形の器と揃いで装飾セットをなすよう作られた。セーヴルでは全部で十二の舟形器が制作され、うち十点が現存している。







78 蓋付壺一对の一点  
(Vases Oeufs、卵型壺)  
フランス (セーヴル工場)、1769  
年頃

正面の人物画はジャン＝バティスト＝エティエンヌ・ジェネ  
(1722/23年もしくは1730年生、  
1789年没) 作 (推定)

軟磁器、青地 (ファローブルー)、  
エナメルグリザイユ画、鍍金、  
ブロンズ鍍金細工

高さ 45.1cm

幅 24.1cm

奥行 19.1cm

86.DE.520.1-.2

左の拡大図参照



卵型壺は他に1914年にサンクト・ペテルスブルグのガッチナ宮のものがあったが、これも今は所在不明で、この一对がほとんど唯一と言える。ファローブルーという青い地色は、1764年に使われるようになり1771年から作品が出回り始めた。グリザイユ陶画とブットーの装飾部分は、青地を削り取ってから焼成するアンクリュステという手法が使われており、陶画家ジェネがこれを好んで使ったことからこの作例の装飾も彼の手によるものと推定されている。

左の詳細図に見られるように、生贄を捧げる場面を描いた陶画が描かれているが、その由来や意味は判明していない。

79 戸 棚

フランス（パリ）、1765年頃  
 ヨーゼフ・バウムハウアー（1772  
 年没、1749年頃から国王用達  
 木工）の刻印「JOSEPH」

オーク材に黒檀、ユリノキ、アマ  
 ランスの化粧張り、日本製漆塗の  
 はめ板にマルタンワニスの延長部  
 ブロンズ鍍金細工、銅、碧玉の上  
 板

高さ 89.6cm

幅 120.2cm

奥行 58.6cm

79.DA.58



建築学に則った形状に、縦筋の入った先すぼまりの飾り柱やイオニア様式の柱頭などをあしらった、古典的な意匠の戸棚である。希少で高価な材料を使って作られている。正面の大きな漆塗パネルは17世紀の日本のもので、やすりをかけて木目を際立たせた板の素地に、漆塗の図柄を盛り上がらせた「木地蒔絵」という技法が使われている。当時のフランス製家具で「木地蒔絵」の大型パネルで飾られた作例は極めて珍しい。イオニア様式の飾り柱の縦筋には銅箔細工が施され、色調を豊かにしているだけでなく、ブロンズ鍍金細工と面白いコントラストを見せている。上板は大理石ではなく、黄色い碧玉という半貴石が使われている。





80 コモード  
フランス（パリ）、1769年  
ジル・ジュベール作（1689-1775  
年、1758年に家具大賞受賞家具  
職人、1763-1774年に国王用達  
木工）

オーク材にシタン材、ユリノキ材、  
ヒイラギ、ブラッド材もしくはボ  
ワ・サティネと黒檀の化粧張り、  
ブロンズ鍍金細工、サランコラン  
大理石上板  
高さ 93.5cm  
幅 181cm  
奥行 68.5cm  
55.DA.5

1769年8月28日、国王用達家具職人のジュベールが制作した一对の箆笥が、ヴェルサイユ宮殿内にあるルイ15世の娘ルイーズの寝室へ届けられた。その際王室調度品目録に制作者、寸法、詳細が記録された後ふられた目録番号2556.2は、今でも裏にくっきりと刻まれている。これと対のもう一点は、今は行方がわからない。

ジュベールは1748年から1774年に引退するまで、王室調度品の制作を請け負う栄誉に恵まれた。ジュベールの作風は初期はロココ様式だったが、1760年代にはこの作品のような新古典主義へと転向した。



81 コンソールテーブル  
フランス（パリ）、1765-1770年頃  
ヴィクトール・ルイ（1737-1807  
年）のデザイン  
ピエール・ドゥーミエ作（推定）  
（活動期1760年代以後）

銀張りとブロンズ鍍金、トルコブ  
ルー大理石上板、  
現代人造大理石の台  
高さ 83.5cm  
幅 129.5cm  
奥行 52cm  
88.DF.118

これと同じテーブルがポーランド王スタニスラウス＝オーギュスト・ポニアトウスキー  
のために、建築家のヴィクトール・ルイがデザインしたテーブルの素描（1766年の日付  
と署名入り）をもとに制作された。1769年にワルシャワの王宮に納入されたものだが、  
今は所在が知れない。

金属だけで作られた家具は稀で、現存例はわずかしかない。もともと鍵職人で細かい  
金属細工を得意としたピエール・ドゥーミエが、この量感ある新古典主義様式のコンソ  
ールテーブルの制作者であることはほぼ間違いない。彼は1763年のフランスの新聞に、こ  
れにほぼ該当するテーブルの広告を出している。ドゥーミエは1766年から1768年にか  
けて総額25,714リーヴルに及ぶ調度品をワルシャワの王宮に納めた。



## 82 置時計

フランス（パリ）、1772年頃  
外枠はエティエンヌ・マルタン  
クール作（推定）（1791年以後  
没、1762年に名工）

文字盤と時計本体はシャルル・  
ル・ロワ（1709-1771年、1733  
年に名工）が創始し、死後息子  
のエティエンヌ＝オーギュスタ  
ン・ル・ロワ（1737-1792年、  
1758年に名工）が継いだ工房の  
作。文字盤に「CHARLES LE  
ROY/APARIS」、本体に「Chles  
LeRoy AParis」の印

時計バネ二つに「Richard fevrier  
1772」と署名および日付

ブロンズ鍍金、金属エナメルの文  
字盤、ガラスカバー

高さ 71.1cm

幅 59.7cm

奥行 32.4cm

73.DB.78



薔薇柄の格子なども一体で鑄造されているなど（普通は別個に鑄造される）、細部にわたって見事な鑄造技術が見られる時計である。「天文学」と「地理学」を擬人化した女性像は造形に優れ、卓越した彫刻家が手掛けたものに違いない。全体がブロンズ製の作例の常として金工の名は入っていない。しかし、エティエンヌ・マルタンクールの署名入りのデッサンが残っているほか、時計職人のジャン＝アンドレ・ルポートの目録に、マルタンクール作とした類似の時計の記述があることから同者の作と推定される。1790年の王室調度品目録に、この型の時計で文字盤にシャルル・ル・ロワと署名のあるものが、パリのチュイルリー王宮の王の閣議の間の備品として記載されていることから、この時計はルイ16世の所蔵であったとされる。

83 譜面台

フランス（パリ）、1770-1775年頃  
マルタン・カルラン作（推定）  
（1730-1785年頃、1766年に名工）

オーク材にユリノキ材、アマラン  
ス、ヒイラギ、果樹材の化粧張り、  
採色漆喰の象嵌、ブロンズ鍍金細工

最大高 148.6cm

最低高 94.2cm

幅 50.2cm

奥行 36.8cm

55.DA.4



1730年代前後、フランスの家具職人やデザイナーは、顧客の用途に合わせて極めて特殊な家具を作りだした。この種の譜面台はサロン、音楽室、あるいは書斎など、来客が集まり談話や娯楽に興ずる場所に置かれた。ここにある譜面台は、立った演奏者にも座った演奏者にも合うよう高さが調節できるほか、両脇にはローソク立てもついている。

マルタン・カルランは、エトルスク様式もしくはアラバスク様式とよばれる洗練された新古典主義様式の家具で知られ、専ら小間物商人の注文を請け負った。



84 スクレテール（書き物机）  
フランス（パリ）、1770-1775年頃  
フィリップ＝クロード・モンティ  
ニ（1734-1800年、1766年に名  
工）の印、「MONTIGNY」

オーク材にべっこう、真鍮、しろ  
せ、黒檀の化粧張り、ブロンズ鍍  
金飾り

高さ 141.5cm

幅 84.5cm

奥行 40.3cm

85.DA.378



1777年のパリの新聞に、モンティニはべっこう、黒檀、真鍮を使って「名人ブールのような様式」で装飾した家具を作ることによって評判、という旨の記事が載っている。このスクレテールはブールの作と見られる17世紀末のテーブル二点の上板を転用しており、一枚は横半分に切って下ろせば筆記台になる正面パネルとその下の戸棚の扉に、もう一枚は縦半分に切って脇板に使っている。後者の中央にある模様は、ブール作とされるテーブル[43]の中央にある模様に似たものを拡大したものだ。

この書き物机の形とブロンズ鍍金細工は、グー・グレーク（ギリシャ様式の意）として知られる初期新古典主義様式の典型で、この様式は当時最も流行に敏感な貴族の間で人気だった。事実、宮廷人ビリー氏の1784年の売却目録にこの机の詳しい記述があり、1787年のヴォードリュイ伯爵の売却目録にも記述がある。

85 壺一对の一点

フランス（パリ）（推定）、1765-1770年頃

エンヌモン＝アレクサンドル・ブティト（1727-1801年）のデザインを描いたベニーニョ・ボッシ（1727-1792年）の銅版画に基づく

ポーフィリ（長石入り硬岩石）、赤大理石、ブロンズ鍍金細工

高さ 38.7cm

幅 41cm

奥行 27.7cm

83.DJ.16.1-2



1764年にブティト作の31通りの陶器デザインが版画で出版されたが、この壺はそのうちのひとつに厳密に基づいたものだ。ブティトはフランス出身で、1753年にイタリアのパルマ領主フェルディナンド公（1751-1802）の宮廷建築家としてパルマに転居した。このデザイン版画集は初代のパルマ宰相でフェリノ公爵のギヨーム＝レオン・デュ・ティロ（1711-1774）に献上されたもので、このデザイン集からはこの壺の他に三通りが公爵邸の庭園用の大壺に採用されただけで、単に空想的で実用に至らないデザインがほとんどだった。

ポーフィリでできた本体はイタリアで作られたと見られ、ブロンズ鍍金細工はパリの金工の作と思われるが制作者は不詳だ。





86 サイド・テーブル  
イタリア、1760-1770年頃

トウヒ材とリンデン材に彫刻と鍍金、貴石の上板  
高さ 105cm  
幅 153cm  
奥行 74cm  
87.DA.135

このテーブルの透かし細工は、繊細で複雑な曲線のデザインを特徴とするロココ様式にあって素晴らしく独創的な作例である。外側の四脚に加え、花のドレープで飾られた曲線状の横木に連結した内側の入り組んだ二脚の、合計六脚で支えられている。このような風変わりで空想的な形状に組み合わせて、18世紀後半の新古典主義様式の落ち着いた趣も見られる。周囲に施された雄羊の頭像、アーカンサスの葉、幾何学的な型の鍵など古代のものに触発された装飾がそれで、ヨーロッパでの新古典主義の誕生と発展を担った主導者の一人であるジョヴァンニ・バッティスタ・ピラネジ（1720-1778）の影響を受けた家具職人が、このテーブルの制作に携わったことが窺われる。

18世紀後半のイタリア家具の傾向に一風変わった解釈を加えたこの机は、どこか家具生産の主流から外れた、当時空想的かつ上品な新古典主義家具の一種が制作されていたバルマのエミリアあたりで作られたように思われる。

- 87 ブロンズ鍍金細工付きの壺一对  
磁器：中国（清の康熙帝時代、  
1662-1722年）  
ブロンズ飾り：フランス（パ  
リ）、1770-1775年頃

磁器、黒の地色、鍍金（ほとんど  
剥落）、ブロンズ鍍金細工  
高さ 49cm  
幅 24.7cm  
奥行 20cm  
92.DI.19.1-.2



強堅な施釉と光沢ある仕上がり「黒鏡」として知られる、珍しい中国陶器の壺である。この種の単色中国陶器は康熙時代の新作家らしく、19世紀に収集家の間で大層人気を博した「ファミュー・ノワール」と呼ばれる瑤瑯と混同してはならない。

この器は独特なデザインのブロンズ鍍金細工が施されており、その優れたデザインと質の高い細工は、不詳とはいえ確かな技術を持ったブロンズ細工師の仕事であることを示している。パリで1770年代に流行した新古典主義様式を汲んだデザインは、1768年頃から出回り始めたジャン＝シャルル・ドラフォス（1734-1789）の装飾版画の影響を受けたものかも知れない。かつてブロンズ鍍金の小さな蓋が付いていたが紛失した。





- 88 装飾壺三点揃い (Vases des âges)  
 フランス (セーヴル工場)、1781年  
 ジャック＝フランソワ・ドゥパリ  
 (活動期1735-1797年)のデザインを基に、エティエンヌ＝アン  
 リ・ボノ (1742年生、活動期  
 1754-1781年)が制作  
 ジャン・バティスト・ティリアー  
 (1740-1813年頃)の版画を基に  
 した、アントワヌ・カトン (活  
 動期1749-1798年)による陶画  
 エナメル細工はフィリップ・バル  
 ペット作 (1736-1808年頃)  
 平型鍍金はエティエンヌ＝アン  
 リ・ル・ゲ (父) (1719/20-1799年)

軟磁器、ブルーヌーヴォーの地色、  
 多色エナメル装飾、透明及び不透  
 明の「貴石」、鍍金と金箔

二壺に金でL二文字を十字に重ね  
 たセーヴル工場章とイニシャルLG  
 (中央の壺)

高さ 47cm

幅 27.7cm

奥行 19.3cm

(両脇の壺)

高さ 40.8cm

幅 24.8cm

奥行 18.4cm

84.DE.718.1-3

セーヴル工場で1778年から生産されたこの「ヴァーズ・デザージュ (年代壺)」と呼ば  
 れる陶器には三種類の大きさがあり、大には老人、中には若い女性、小には少年のそれ  
 ぞれ頭像を配した蓋がついていた。この作例は1781年にルイ16世に売却され、ヴェル  
 サイユ宮殿内の図書室に飾られていた五点揃いの三点で、より小型の他の二点は現在バ  
 ルティモアのウォルターズ美術館に所蔵されている。

正面の陶画はフェヌロン著の「テレマコスの冒険」の挿絵版画を基にしている。1780  
 から1785年にかけてセーヴル工場で盛んだった、宝石、真珠、緑瑪瑙を模した彩色エナ  
 メルを使って、型押しした金箔を鎮める高価な細工を施したものだ。主に装飾品として収  
 集された受け皿付ティーカップなどを飾るのに使われた手法で、このような大きな壺に  
 施されたのは稀である。

89 スクレテール（書き物机）  
フランス（パリ）、1775年頃  
ルネ・デュボワ（1737-1799年、  
1755年に名工、1779年に女王  
用達木工）作

オーク材にシタン材、ユリノキ材、  
ヒイラギ、染色シデ材、黒檀の化粧  
張り、彩色漆喰の象嵌、螺鈿、ブ  
ロンズ鍍金細工、灰色大理石上板  
高さ 160cm  
幅 70.2cm  
奥行 33.7cm  
72.DA.60



パネルを下ろせば筆記台と仕切り、下には収納戸棚、さらにガラス戸つきの飾り棚が設えられた機能的なスクレテールである。正面パネルを飾る螺鈿入りの寄木細工の四葉模様とブロンズ鍍金の花鎖が角張った形状に柔らかさを与えている。

主に家具と彩色仕上げを専門に業者相手の仕事をしたルネ・デュボワはジャック・デュボワ[71参照]の息子で、一族の工房はフランス革命で没落するまで50年間活動を続けた。



90 スクレテール（書き物机）

フランス（パリ）、1776-1777年頃  
本体にマルタン・カルラン（1730-  
1785年頃、1766年に名工）の  
印「M.CARLIN」

大型陶板二枚の画はエドメ＝フ  
ランソワ・ブイヤ作（1739/40-  
1810年）

小型陶板二枚の画は後継者の  
ロー作（活動期1766-1779年）

オーク材にユリノキ材、アマランス  
の化粧張りヒイラギと黒檀の象嵌  
五枚のセーヴル軟質陶板：トルコ  
ブルーの地色の縁取り、多色エナ  
メル装飾、鍍金、金属エナメル、  
ブロンズ鍍金細工、白大理石上板  
一枚に1776年の日付を意味する文字  
Y、もう一枚に1777年のZの記入

高さ 107.9cm

幅 103cm

奥行 35.5cm

81.DA.80



18世紀中葉から流行した縦型のスクレテールで、パネルを下ろせば筆記台になり、引出と仕切棚が内蔵されている。

マルタン・カルランはセーヴル製の陶板をはめ込んだ家具を専門とした。この高価な装飾様式は1760年前後から始まり、十年もしないうちに大流行となった。二枚の大型陶板（ブラック・カーレ）に描かれた陶画は1770年代半ばのセーヴル陶器によく見られるものだが、これほど精緻な作例はめったにない。









- 91 テーブル  
イタリア（ローマ）、1780年頃  
フランチェスコ・アントニオ・  
フランゾーニ作（カラーラ生れ、  
ローマにて活動、1734-1818年）

大理石  
高さ 100cm  
幅 200cm  
奥行 81cm  
93.DA.18

左の拡大図参照

このテーブルを制作したフランチェスコ・アントニオ・フランゾーニは、18世紀後期にローマで活躍した代表的な彫刻家であり古代彫刻の修復家の一人だ。この見事なテーブルに見るように、古典的なモチーフを抑制の効いた新古典主義的な装飾に創意的に組み込んだ独特なデザインを得意とした。フランゾーニは、古代彫刻を集めたバチカン・ピオ＝クレメンティーノ美術館における業績で最も良く知られ、重要な古代の彫刻の修復のみならず装飾と調度にも携わった。例えば同美術館のアニマリの間にはこれとほぼ同じテーブルが一对ある。これは法王ピウス6世の時フランゾーニがブスティの間用に作ったものである。

支柱には上品な台座の上に、有翼の雄羊を月桂樹の飾りで連ねた像が華麗に彫り出されている（左図参照）。上板は非常に大きく厚みのあるもので、アピュアネ・アルプスにあるメディチ家の採石場から切り出された、「プレッチャ・メディチエア」と呼ばれる紫、赤、白が混ざり合った美しい大理石でできている。

92 タピスリー、「ドン・キホーテ」シリーズから「サンチョ・パンサのバラタリア島到着」  
 フランス（パリ）、1771-1772年  
 ゴブラン工場のミシェル・オー  
 ドラン（1701-1771年）と息子  
 のジャン・オーダラン（1771-  
 94年にゴブラン工場の主宰）の  
 工房作  
 カルトン下絵はシャルル＝アン  
 トワヌ・コワペル（1694-  
 1752年）作  
 アラントゥール（縁飾り）のデザ  
 イン：1721-1760年、ジャン＝バ  
 ティスト・ブラン・ド・フォンテ  
 ネー（子）（1668-1730年）、クロ  
 ード・オーダラン3世（1658-1734  
 年）、アレクサンドレ＝フランソ  
 ワ・デポルト（1661-1743年）、モ  
 ーリス・ジャック（1712-1784  
 年頃）作、カルトン下絵はアン  
 トワヌ・ボワゾ（1702-1782年  
 頃）作

毛と絹、現代木綿裏地  
 縦 368cm  
 横 414cm  
 82.DD.68

右の拡大図参照



スペイン人騎士の愉快な冒険を綴ったセルヴァンテス（1547-1616）の有名な空想小説「ドン・キホーテ」を主題にしたタピスリーで、コワペルによる28枚の絵を基に1771年から1794年にかけてゴブラン工場で織られた物の一点。1772年の日付入りのこの作例はもう三点と一揃いにして、1786年にルイ16世からマリー・アントワネットの姉妹とその夫であるザクセン＝テッシェン公爵に国家間の正式な贈答品として贈られた。









### 93 戸 棚

フランス（パリ）、1788年  
ギョーム・ベヌマン（1811年没、  
1785年に名工）の印「BENEMAN」

オーク材に黒檀とマホガニーの化粧張り、黒檀の脚、17世紀と18世紀のピエトレ・デューレ（象嵌）のパネル、ブロンズ鍍金細工、トルコブルー大理石上板

高さ 92.2cm

幅 165.4cm

奥行 64.1cm

78.DA.361

サン＝クルー城内のルイ16世の寝室の調度品として1788年に納品された一対のひとつであるこの戸棚について、宮廷御用の木工家具商ジャン・オーレの同年の日記に制作者など詳細にわたる記述が残っている。ブロンズ鍍金細工は、ジル＝フランソワ・マルタン（1713-1795年頃）が型を取り、エティエンヌ＝ジャン・フォレストイエール（1764年に名工）が鋳造し、アンドレ・ガル（1761-1844）が鍍金を施し、ピエール＝フィリップ・トミール（1751-1843年、1772年に名工）が打出し模様を入れたものだ。大理石の上板はランファンによる。

本来、王室宝庫にあった日本製漆塗の四折屏風から転用されたパネルがはまっていたが、フランス革命以後のある時点でピエトレ・デューレ（貴石象嵌）に取り替えられた。

これと対の戸棚はマドリッドの王宮にあるが、これも漆塗パネルが外され、ジョセフ・ヴァルネによる港の風景画を基にした寄木細工のパネルに取り替えられている。



94 台付き壺

磁器：清、乾隆帝時代（1736-1795年）18世紀中葉

ブロンズ鍍金飾り：フランス（パリ）、1785年頃

ピエール＝フィリップ・トミール作（推定）（1751-1843年、1772年に名工）

青地の磁器、ブロンズ鍍金細工、ルージュ・グリオット大理石

高さ 81cm

直径 56.5cm

70.DI.115



ブロンズ鍍金を主にした台に大型の中国磁器をはめ込んだこの器は、二つ揃いのうちの一点である。マリー・アントワネットの友人だったポーランドのイザベラ・ルボルミルスカ王女の所蔵だったもので、この王女は1794年にヴェルサイユ宮殿で収集品が競売にかけられた際、この壺を買い取ったとされる。（この壺はその後玄孫のアルフレッド・ポトッキの手に渡ってから、当美術館が購入するに至る。）もう一点の方は同じ競売で競り落としたトミール商会の仲介で1812年に後のジョージ4世の摂政時代にロンドンのカールトン屋敷に納品されて以来、今も英国王室に所蔵されている。

ブロンズ鍍金細工にトミールの初期の作品の特徴が見られ、葡萄の実と葉、先が巻いた畝入りの角などのモチーフは、彼の作として記録にある作品の数々にも見られるものだ。

95 ロールトップデスク

(Secrétaire à Cylindre)

ドイツ (ノイヴィート・アム・ライン) 1785年頃

机はダーフィット・レントゲン作 (推定) (1743-1807年、1780年に名工)

ブロンズ鍍金パネルはピエール・グティエール作 (推定) (1732-1812/14年、1758年に名工)、ブロンズ鍍金細工の一部はフランソワ・レモン作 (1747-1812年頃、1774年に名工)

オーク材とパイン材にマホガニーとカエデの節の化粧張り、ブロンズ鍍金細工、金具

高さ 168.3cm

幅 155.9cm

奥行 89.3cm

72.DA.47



有名なアブラハム・レントゲン[74参照]が18世紀初めにドイツのノイヴィートに創始した工房を相続した、息子のダーフィットが作った大きな机である。フランス王室を始めヨーロッパ中の宮廷調度品を手掛け、1779年フランス王室から「王室付木工師」に任命された。

レントゲン作の家具の多くには、共同制作者で時計職人であり技術者のペーター・キンツィング (1745-1816) が作った大掛かりな仕掛けが組み込まれていて、このロールトップデスクにも典型的な複雑な仕組みが見られる。ロールトップパネルを開け隠されたボタンやレバーを操作すると、何段もの引出が自動的に開くようになっている。ブロンズ鍍金のパネルが付いた上部は、鍵を回すと開いて出てくる仕掛けが幾つも内蔵されており、インク壺と吸い取り砂容器の仕切と下には小さな引き出しもついた折畳み式書見台になっている。



96 縦型オルゴール付き時計

ドイツ（ノイヴィート＝アム＝ライン）1784-1786年

ケースはダーフィット・レントゲン作（1743-1807年、1780年に名工）、時計本体はペーター・キンツィング作（1745-1816年）、時計本体に「Roentgen & Kinzing a Neuwied」の銘入り

ブロンズ鍍金細工はフランソワ・レモン作（1747-1812年頃、1774年に名工）

オルゴール部分はヨハン・ヴィルヘルム・ワイル作（1756-1813年）、「Jean Guillaume Weyl Fait a Neuwied le 16 May 178[?]'」の銘入り

オーク材とカエデ材にカエデの節の化粧張り、ブロンズ鍍金細工、金属エナメル製文字盤、ガラスの扉、青く染色した鉄鋼

高さ 192cm

幅 64cm

奥行 54.5cm

85.DA.116



この型の時計はレントゲン作のものでは最も人気があったらしい。多くが太陽神アポロを冠したもので、この作例にも接続用の穴が残っていて、豎琴を弾くアポロの大きなブロンズ鍍金像あたりが付いていたとしてほぼ間違いない。このほかの装飾も一貫して時間を象徴するもので、時の父クロノスが文字盤を支え、その上に掛かった花綱飾りに組み込まれた春の花、夏の麦、秋の葡萄、冬の柊が季節の移り変わりを表わしている。さらに上の飾りメダルの中には昼と夜の擬人頭像が配され、時を司るアポロの豎琴が最上に据えられている。

97 木彫りの静物  
フランス（パリ）、1789年  
オーベール＝アンリ＝ジョセフ・  
パラン作（1753-1835）

リンデン材  
底に「AUBERT PARENT FECIT AN.  
1789」の銘  
縦 69.4cm  
横 47.9cm  
厚さ 6.2cm  
84.SD.76

右の拡大図参照



一枚板から彫りだされたこの木彫りの傑作には、オーベール・パランの巧みな技がありありと窺われる。1777年、ルイ16世に自作のパネルの献上が叶ったことがきっかけとなって彫刻家として揺るぎない地位を確立したパランは、自然を写實的に表わした彫刻と、1784年から1788年にかけてのイタリア滞在で得た古代美術の知識で、ヨーロッパ中に知れ渡っていた。この浮き彫りは（古代の美術品から着想を得た）台に置かれた花を活けた壺と、蛇から巣を守ろうとしている鳥のつがいを描いたもので、親の義務を表わしているだけでなく革命前のフランスにおける民衆に対する国王の責任をも暗示している。











98 シャンデリア

フランス（パリ）、1818-1819年頃  
アンドレ・ガル作（1761-1844年）

ガラス、金属エナメル、ブロンズ  
鍍金  
高さ 129.5cm  
直径 96.5cm  
73.DH.76

左の拡大図参照



アンドレ・ガルは、ルイ16世にもナポレオンとナポレオンの家族の多くにもブロンズ鍍金細工品を収めた。その後王政復古に際しては、パリ博覧会用やそれ以前に制作した作品をルイ18世に提供した。この型のシャンデリアもその一つで、1819年のフランス産業博覧会に「リュストル・ア・ボアソン（魚の釣燭台の意）」として出展したものだ。ガルは王への説明文には、天球から吊られたガラス器は金魚鉢を意図したもので、「金魚が泳ぐ様は大変目を楽しませるもの」と説明している。ルイ18世は興味を示さなかったらしく、該当するシャンデリアは調度品目録に載っていない。

鍍金の星が差し込まれた青いエナメルの天球には、黄道十二宮が並んだブロンズ鍍金の帯がかかっている。ガラス器の上を飾るグリフィンや薔薇飾りがついた大きな巻物を始めいくつかの装飾モチーフは1801年に発行されたペルシエールとフォンテーヌによる「内装デザイン集」にあるシャンデリアの版画に描かれている。

- 99 壁掛燭台一对の一点  
フランス（パリ）、1787年頃  
ピエール＝フランソワ・フーシェ  
ール（1737-1823年、1763年に  
名工）

ブロンズ鍍金  
高さ 61.6cm  
幅 32cm  
奥行 18.5cm  
78.DF.90.1-2



1787年にフーシェールはこの種の壁掛け燭台を、パリにあったティエリ・ド・ヴィル・ダヴレ長官邸の寝室の調度品として収めている。翌年、サン＝クルー城のマリー・アントワネットの化粧室用に作った、ハートを抱えた翼のある子供の像が付いた一本を加えた同型の壁掛燭台四点は、現在ルーヴル美術館が所蔵している。



100 燭台一对

北イタリア、1832-1840年頃  
フィリッポ・ペラジオ・パラジ  
(ボローニャ出身、1775-1860年)

ブロンズ鍍金  
高さ 90.2cm  
幅 43.2cm  
85.DF.22.1-.2



家具デザイナー、画家、装飾細工師、建築家であり自らも有名な収集家であった、ボローニャ出身のフィリッポ・ペラジオ・パラジ作の燭台である。パラジのデザインは、ナポレオンによってもたらされた帝政様式の強い影響と、自らの選択で取り入れたエジプト、ギリシャ、エトルリア、ローマのモチーフの創意的な組み合わせを特徴とする。1832年にイタリア国王サヴォイ家のカルロ・アルベルトからピエモンテ宮殿の改装を任されており、この格式がありながら創意溢れる燭台には、改装にあたり考慮された王の好みに通ずるものが見られる。

この燭台の一点を描いたパラジのペン画が、ボローニャのアルキジナージオ図書館に所蔵されている。燭台同様このデッサンも、パラジらしく優雅で視覚に訴えるものだ。

## 索引（創作者、制作者、製作所）

数字は掲載ページ

- イヴァール、ボードラン（父） 51  
 ヴァルバウム、マテウス 32  
 ヴェルナンサル、ギ＝ルイ 60  
 ヴォアザン、シャルル 75  
 オードラン、ジャン 116  
 オードラン、ミシェル 116
- カトン、アントワヌ 111  
 カフィエリ、ジャック 86  
 カランドラ、ジョヴァンニ・パッティスタ 43  
 ガル、アンドレ 125  
 カルラン、マルタン 106、113  
 キュヴィリエ、フランソワ・ド 82  
 ギュゼッペ・サンマルティーノ 91  
 キンツィング、ペーター 121  
 グティエール、ピエール 120  
 グリエ、フランチェスコ・  
     サヴェリオ2世・マリア 87  
 クレッサン、シャルル 74  
 クロワ、ジャン・ド・ラ 51、62  
 ゴドロン、アントワヌ（1世） 57  
 ゴブラン工場 51、62、116  
 ゴル、ピエール 53  
 コワベル、シャルル＝アントワヌ 116
- サヴォンヌリー製作所 51、68  
 シャンティイ製磁器所 75  
 ジェネ、ジャン＝パティスト＝エティエンヌ 101  
 ジェルマン、フランソワ＝トマ 88  
 ジェルマン、トマ 88  
 ジュベール、ジル 103  
 ショール、ヨハン・ポール（通称ジョバンニ・  
     パオロ・テデスコ） 48  
 ストロツィ、ベルナルド 46  
 スブラーゲ、ニコラ・ディ・ガブリエレ  
     （通称ウルビノのニコラ） 22  
 セーヴル工場 98、99、101、111
- ダルベール・ダイイ、ミシェル・フェルディナン  
     （5代目ショールネ公爵） 86
- ツイルンフェルド、ヨハン・カール・  
     ヴェンデリン・アンレイター・フォン 84  
 ディエトリッヒ、ヨアヒム 82  
 デクラ、ジャック 79  
 デポルト、アレクサンドレ＝フランソワ  
     68、116  
 デュプレシ、ジャン・クロード 98、99  
 デュボワ、ジャック 93  
 デュボワ、ルネ 112  
 ドゥバリ、ジャック＝フランソワ 111  
 ドゥーミエ、ピエール 104  
 ドガン、シャルル・ニコラ 98、99  
 ドッチア陶磁器工場 84  
 トミール、ピエール＝フィリップ 119
- ノレー、ジャン＝アントワヌ 73
- ハイデン、マルクス 40  
 バウムハウアー、ヨーゼフ 95、102  
 バラジ、フィリッポ・ペラジオ 127  
 バラン、オーベール＝アンリ＝ジョセフ 122  
 バリシー、ベルナル 15  
 パルペット、フィリップ 111  
 フィエフェ、ジャン＝ジャック 80  
 フィステュラトル、ブラウシウス（工房）  
     37  
 ブイヤ、エドメ＝フランソワ 113  
 フェルッチ、ロモロ・ディ・フランチェスコ  
     （通称デル・タッダ） 34  
 フェルナンディア王立製作所（ナポリ）  
     91  
 フォッジニ、ジョヴァンニ・パッティスタ  
     84  
 フォンタナ、アンニバーレ 23  
 フォンタナ、オラツィオ 21  
 フォントネー、ジャン＝パティスト・  
     ブラン・ド 60、68  
 フーシェール、ピエール＝フランソワ 126  
 プティト、エンヌモン＝アレクサンドル  
     108  
 ブフレーゲル1世、アブラハム 26
- ブラン、ジャン 65  
 フランゾーニ、フランチェスコ・アントニオ  
     115  
 ブール、アンドレ＝シャルル 55、56、57、  
     58、67  
 ブルスキ、ガスペロ 84  
 ベアーグル、フィリップ 60  
 ヘークステッター、セバスチャン（工房） 13  
 ベヌマン、ギョーム 118  
 ボーヴァイス製作所 60  
 ボッシ、ベニーノ 108  
 ボノ、エティエンヌ＝アンリ 111  
 ボールド、ルイ 73
- マッフェイ、アントニオ 19  
 マルタン一族 73  
 マルタンクール、エティエンヌ 105  
 マルティニエール、アントワヌ＝ニコラ 93  
 メディチ陶器工場 27  
 モノワイエ、ジャン＝パティスト 60  
 モンティニ、フィリップ＝クロード 107
- ユヴァッラ、フランチェスコ・ナターレ 77  
 ユバン、ジャン・フランソワ 97
- ラッツ、ジャン＝ピエール 81  
 リゴツィ、ヤコボ 34  
 リザンブール、ベルナル・ヴァン（2世）  
     79、83、94  
 ルイ、ヴィクトール 104  
 ル・ゲ、エティエンヌ＝アンリ（父） 111  
 ル・ノワ、エティエンヌ（2世） 79、93  
 ル・ブラン、シャルル 49、51、62  
 ル・ロワ、エティエンヌ＝オーギュスタン 105  
 ル・ロワ、シャルル 105  
 レモン、フランソワ 120、121  
 ロウダト、ジェナッロ 91  
 レントゲン、アブラハム 96  
 レントゲン、ダーフィット 120、121
- ワイル、ヨハン・ヴィルヘルム 121



J. ポール・ゲティー美術館の傑作は、世界に誇る当美術館所蔵の名品を全七巻のシリーズで紹介したものだ。古代美術、装飾美術、デッサン、彩飾写本、絵画、写真、彫刻部門のそれぞれから厳選した作品を、豪華なカラー図版に歴史や美術史にちなんだ解説を添えて紹介したこの比類ない集大成には、過去五千年の美術の感動の全容が収まっている。

J. ポール・ゲティー美術館の傑作  
シリーズの他のタイトル

J. ポール・ゲティー美術館の傑作：  
古代美術

J. ポール・ゲティー美術館の傑作：  
デッサン

J. ポール・ゲティー美術館の傑作：  
彩飾写本

J. ポール・ゲティー美術館の傑作：  
絵画

J. ポール・ゲティー美術館の傑作：  
写真

J. ポール・ゲティー美術館の傑作：  
彫刻

本巻は、J. ポール・ゲティー美術館所蔵の百余点を数える西洋装飾美術を美しい図版により紹介したものだ。16世紀中葉から19世紀初頭にかけて作られた、フランスやイタリア製家具のコレクションが豊富で、アンドレ＝シャルル・ブールやベルナール・ヴァン・リザンブール(2世)を始め、見事な芸術的家具を創りだした名匠の離れ業を目の当たりにすることが出来る。この他、磁器、ガラス器、錫釉陶器の優れた作例や、ゴブランやボーヴァイス製作所で織られたタピスリー、フォンテーヌブローのブロンズ製薪乗せ台や、旋盤彫刻により複雑な模様を施したザクセン宮の象牙細工品など、逸品の数々を収録している。

表紙図版

台付き戸棚 [部分]

フランス (パリ)、1680年頃

アンドレ＝シャルル・ブール (推定)

(1642-1732年、1666年以前に名工)

77.DA.1 (no.40参照)

J. ポール・ゲティー美術館  
ロサンゼルス

Printed in Singapore

ISBN 0-89236-462-9



9 780892 364626 90000